北支



現地編輯

THE NORTH CHINA

4[3]

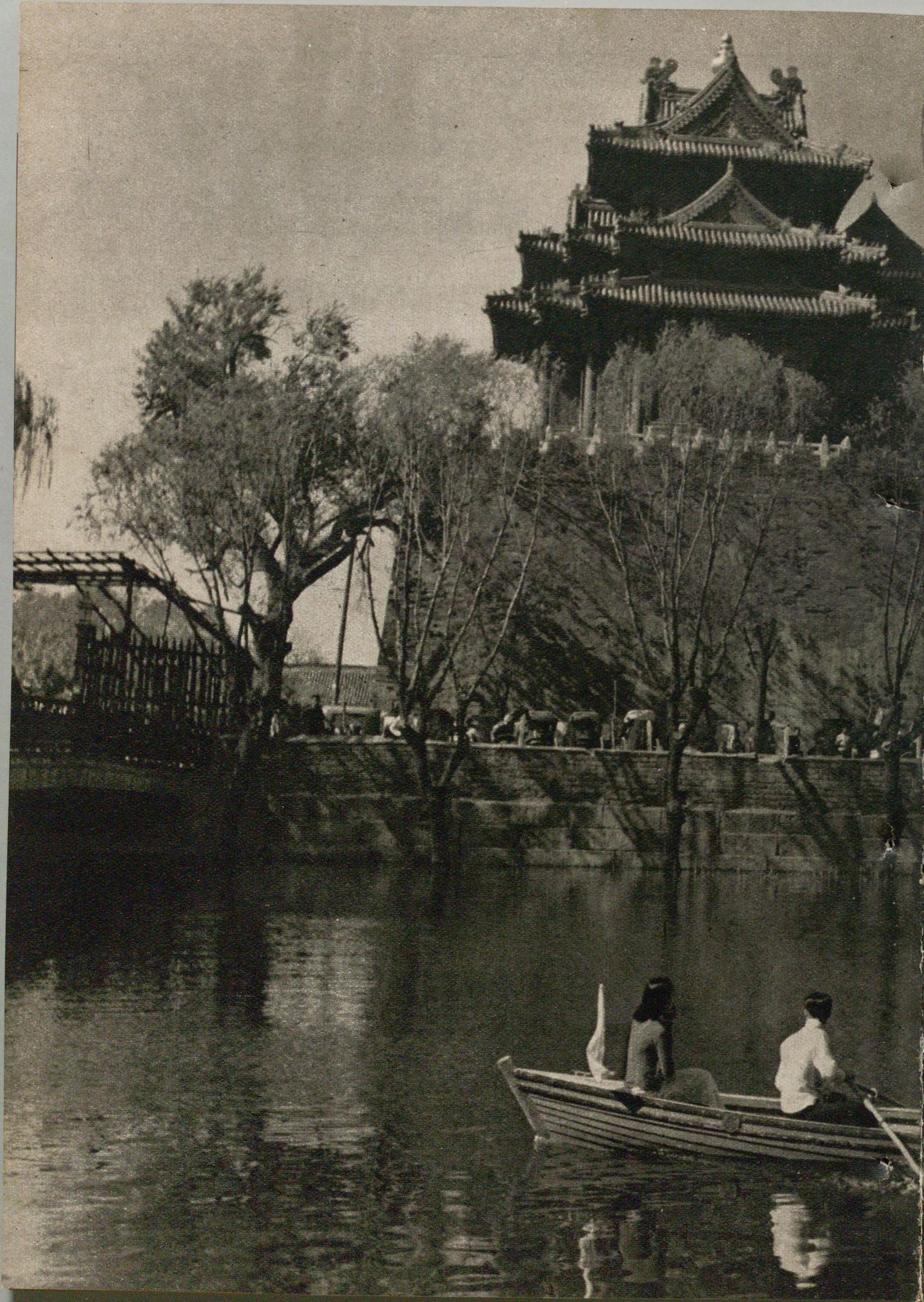
昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十八年三月十五日印刷納本　昭和十八年四月一日發行（毎月一回一日發行）第五十三號

四月



中央公園の濠から
紫禁城の角樓を望む——北京

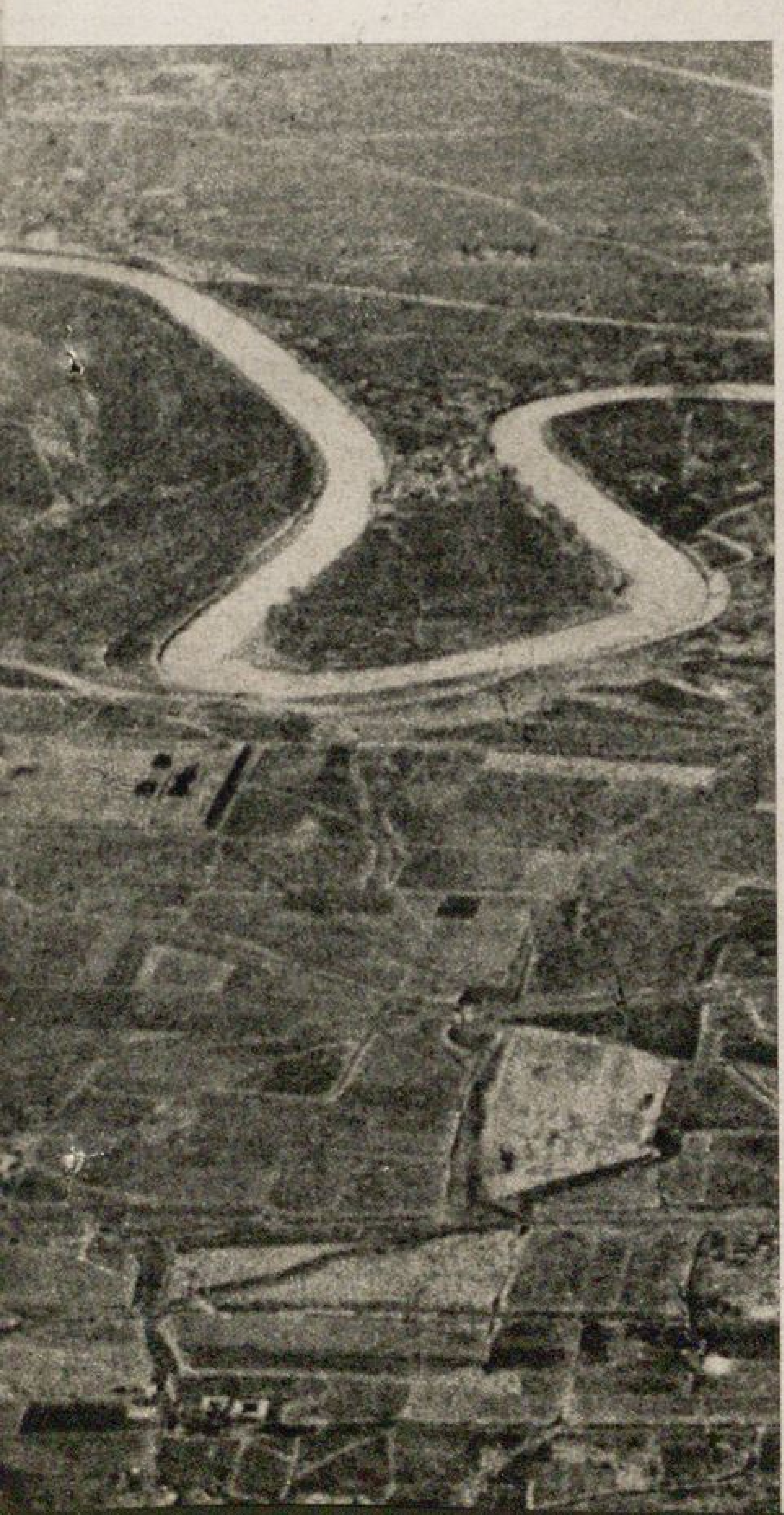
April







曳船をする苦力——小清河



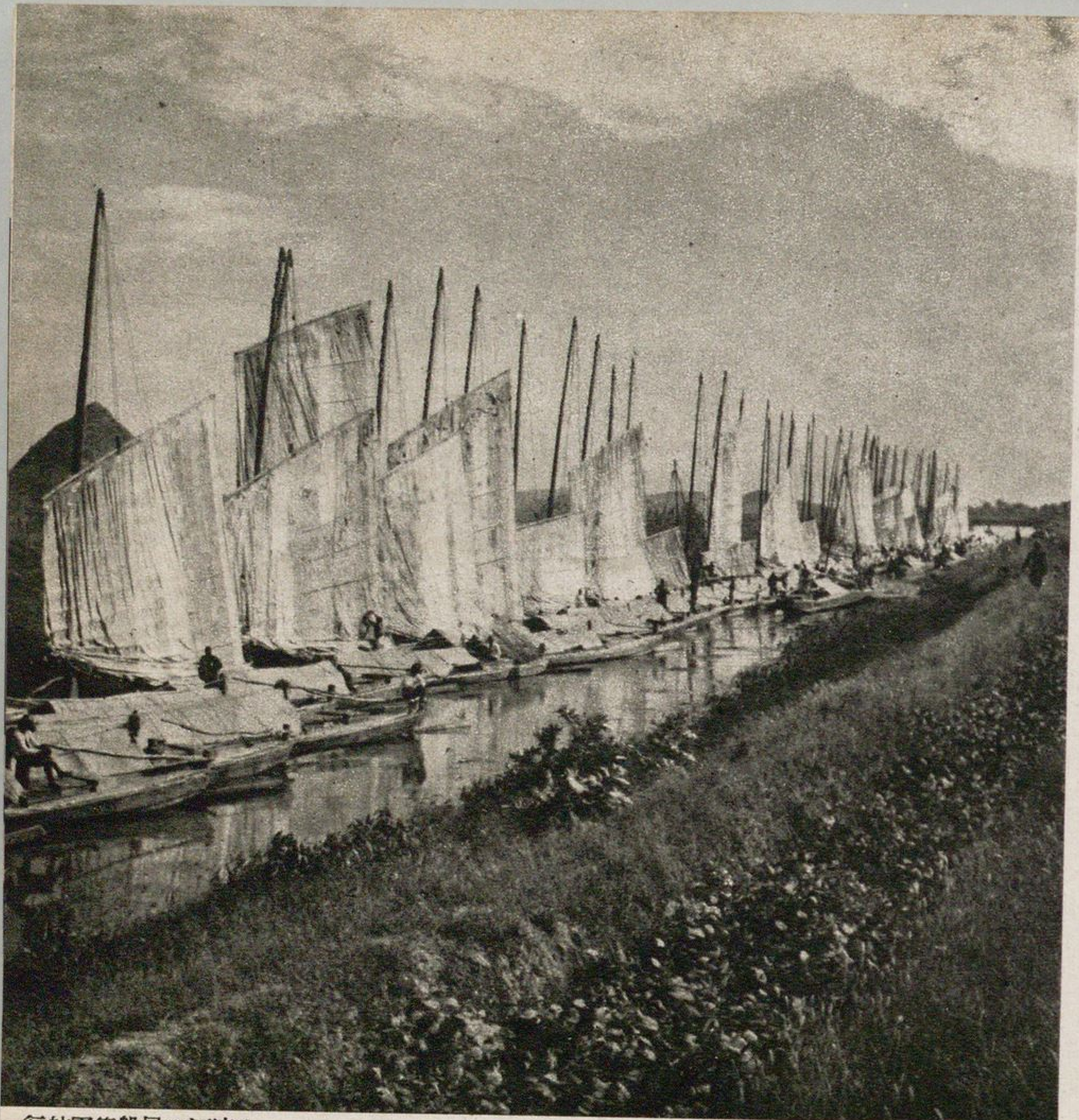
運河　その一

正月の十五日——元宵節が過ぎると、永い冬を送つた北支の運河はそろ〳〵活動期に入る。堅くはりつめた氷も解け、堤には蒲公英、なづな等が若々しい芽を吹き出し、ジャンクの白帆は腹一ぱいに春の風を孕む

支那の文化は一名治水文化と呼ばれ、或は支那社會史は水と人との鬪爭史であるとも云はれるやうに、支那の歴史も文化も河川と共に始まつてゐる

黄河は幾十萬年の昔から青海、甘肅、寧夏、綏遠の黄土を運び出し現在の大平原を造り上げた。そしてこの黄河流域に支那人は初めて農業文化を生み出すことが出來たのである

石炭と鐵とがなければ工業社會が成立し得ないと同樣に、運河—人工灌漑なしに支那の農業經營は考へられない。北支のやうに雨量の少い土地では、降雨だけに賴つてゐては作物に必要な濕度を十分に望み得ないし、また屢〻生



小清河の民船集團航行





空中から見た大運河の一部

Photographic Studies of Chinese Canals

ずる洪水に對する防禦工事としても重要な意義を持つてゐるのである然し支那のやうに人工灌漑の行はるべき面積が餘りにも廣大で、これに要する勞働力の巨大なところでは個々の村落、小さな地方において勝手に行ふことが出來ず、たゞ中央集權的政府權力の上からの干渉によつてのみ行はれたのである。支那の歴代王朝はこの運河といふ支那における農業生産の基礎であり、不可缺的な條件を管理することによつて農民の上に君臨することが出來たとも云へる

運河　その二

春秋以前の時代には有名な禹の治水の傳說があり、秦の始皇帝は涇水から洛水に向け、中山の西から瓠口に達する三百餘里の水道を穿つた。漢の文帝は「大いに卒を興して」黃河の治水を遂行した。隋の煬帝は交通運輸の便を圖るため、洛陽と黃河を結ぶ運河、更に汴水を經て淮水に通ずるもの、江蘇運河、衞河、大運河を陽繋した。そしてこれら運河の兩岸には楊柳を植ゑ、帝は龍の飾りのある船を引かせて開洛から遠く揚子江岸の江都までも行幸したと云はれる。しかしこの樣な豪奢な遊樂の蔭には數百萬の民衆の血と淚が祕められてゐるのである

昔から支那では南船北馬と云はれ、北支に比べて南支河川の水運が開けてゐると云はれてゐるが、北支にも天津や濟南を中心にして縱橫に開けてゐたのである。何と云つても鐵道、自動車の發達しなかつた十九世紀以前は物資の輸送、人間の移動は水運を最も便利とした。そして今日と雖も尙重大な役割を有してゐるのである。事變直前天津の發着貨物が鐵道百九十萬トン、水運によるもの百三十五萬トン、殆んど陸上交通に比肩すると共に陸運との連絡機關として重要な地位を占めてゐることがこの數字によつて窺はれるであらう。北支における運航可能の河川は五千餘キロ、その內三千二百キロが現在華北交通會社によつて經營され、河川を通じて國內深く新時代の息吹きを傳播せしめ、地方產業の開發と治安の確保を促進してゐる





民船の生活・子供の背中の瓢箪の救命具に御注意



南運河の夕暮



山頂にある石

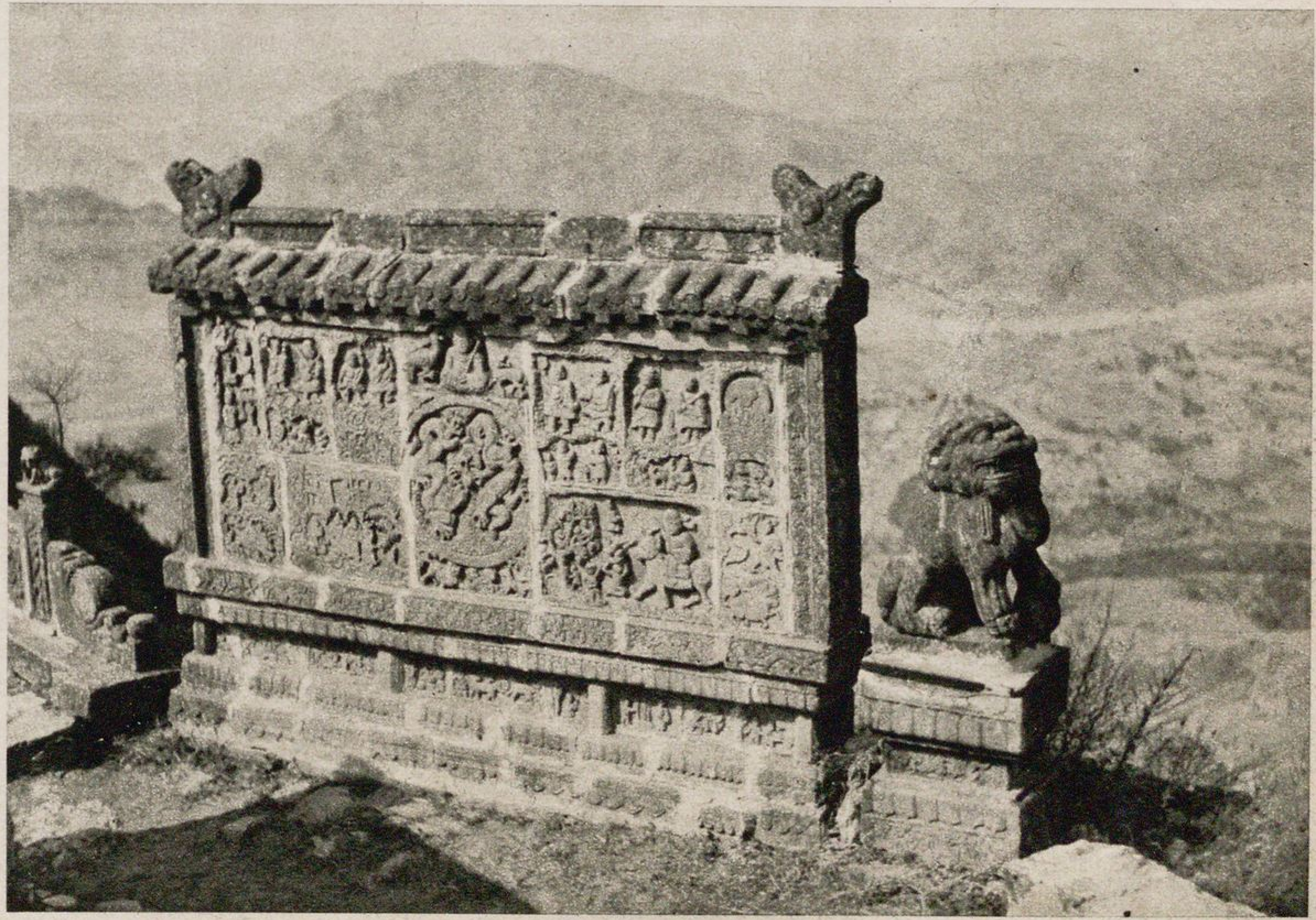
鷄鳴山由來

京包線下花園

京包線で張家口に達する少し手前に下花園と呼ばれる驛がある。「シヤアホアユアヌ」と云ふのが從來の發音だが、事變以來邦人によつて「しもかゑん」と親しみ易い呼び方をされてゐる。この驛に近づくと車窓から行く手に突兀たる山嶽が目を射る。それが名蹟として古くから知られてゐる鷄鳴山である

この山が鷄鳴と云はれる樣になつたのは、唐の太宗が北方征伐に行き、その途中此處を通過し鷄の鳴くのを聞いたからだと云はれるが、それより更に古い傳說もある。それは「水經注」と云ふ有名な書史に、戰國の昔、趙王の襄子が代國を滅してその王を殺した。代王の夫人は、實は襄子の姉だつたので、連れて歸らうとし、丁度この山の所まで來たところ、彼女は「代國已に亡ぶ、吾將に何處に歸らん」と云つて笄を磨きそれを用ひて自殺した。代國の人々はその心

The Chi-Ming-Shan Temple
on the Peking-Paotou Line

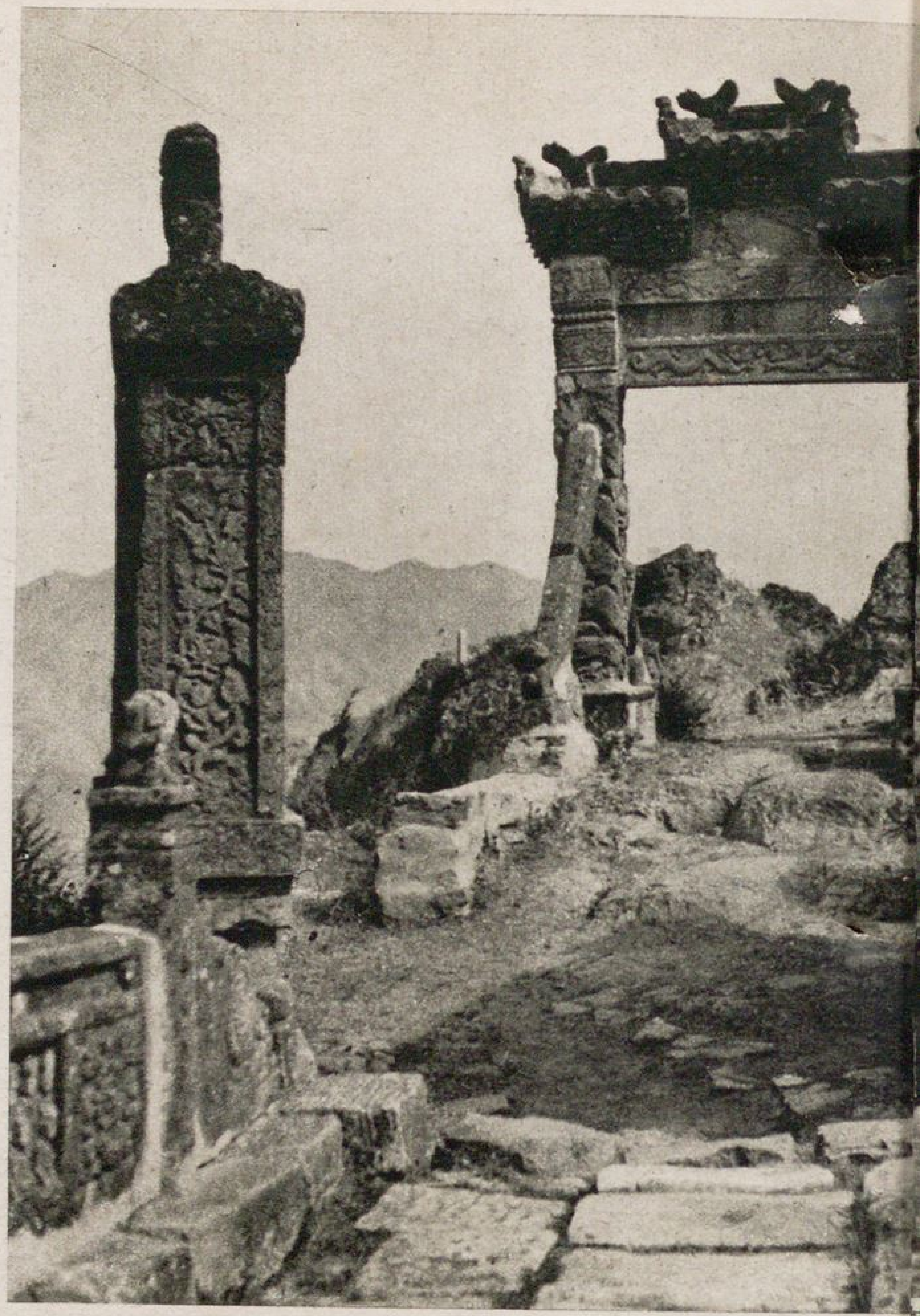


永寧寺の萬年碑

事を憐み、廟祠を建て、山を磨笄山と名付けたのであつた。然るに毎夜野鷄が祠廟に來ては鳴くので又鳴鷄山とも稱する樣になつたと。

今、山頂には大行山脈の山神が鎭座する行宮があり、石坊・避風橋等がその手前に架せられてゐる。山には遼の聖宗の時創建された永寧寺或は鷄鳴古橋等がある。その他魏の昭太后を葬つたのも此處だと傳へられ、附近には同時代に營まれた石窟寺院の址もある

そして又下花園・上花園の名は遼の蕭太后が花園を營んだ跡だと謂はれる等、此處は名勝古蹟が尠くない。歩みを運んで山頂を極めると風光は絶佳である。懷來の盆地を一眸の裡に收め、足下には悠揚たる洋河の流が横はつてゐる





鷄鳴山にある行宮



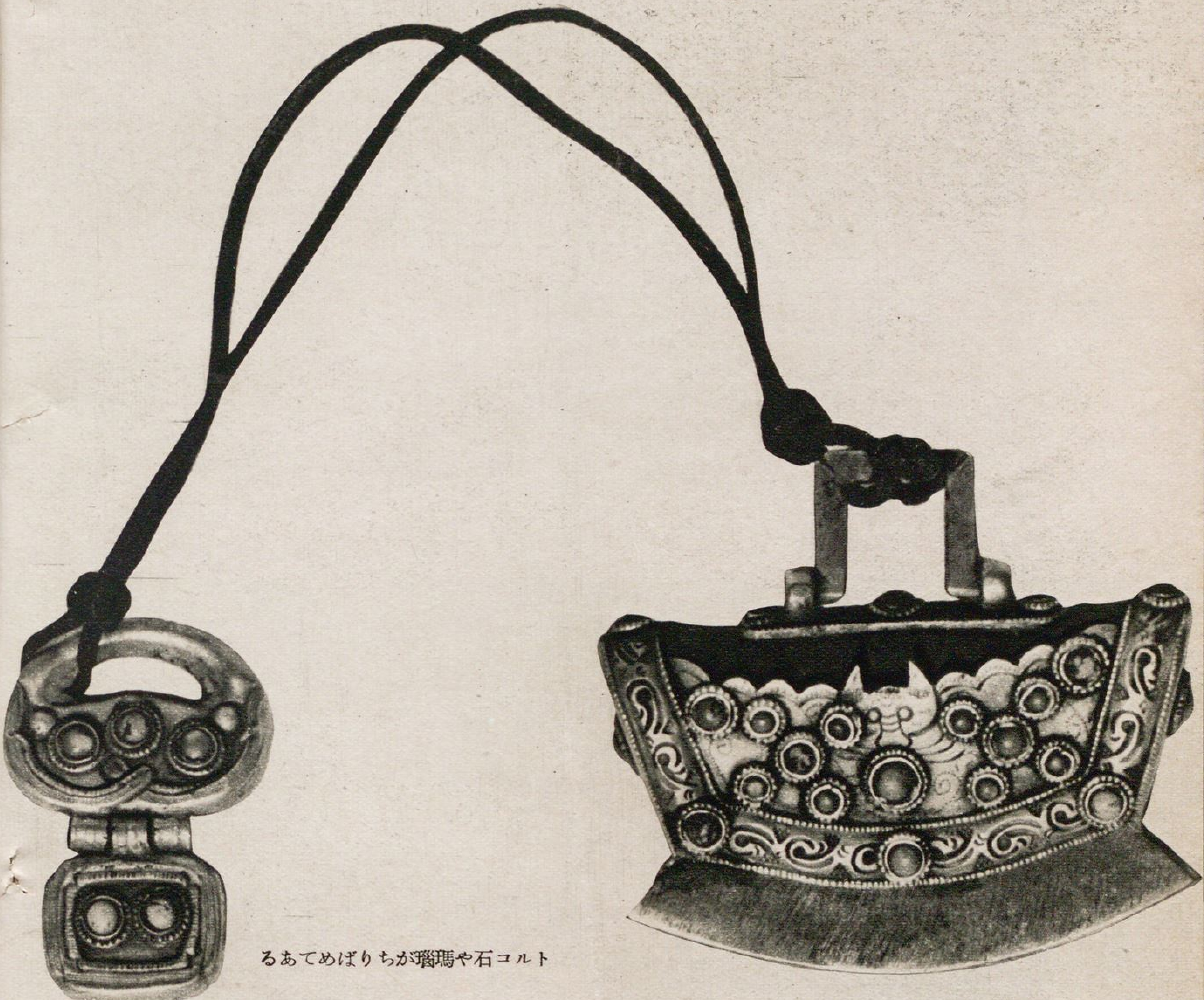
轎車で遊ぶ



會話

火鎌子（ひうちいし）

Flint Stones used in old China



トルコ石や瑪瑙がちりばめてある

古風な火打石が或は時代の寵兒として再登場する時が來るかも知れない。燐寸代用品といふよりも、むしろ發火器としては最も原始的であると共に最も合理的なものである。金と石とを打つてカチツと火花を散らす、それをキヤツチして、たつとい「火」を得た原始人の驚きとよろこびとをその儘に保留し、スケート靴の刄のやうな、反（そり）のある美しい打撃部を露出して、そこにも漢代鏡文かアツシリア模様に似た線刻さへ施したものがある。更にこの重寶器（燐寸のない時代には、かゝる發火器こそ無上の重寶であつたのだ）を愛し尊み、皮革の鞘に納めて、これには特に美しい彫金の技術を施すのみならず、多數の珠玉をさへ鏤め、紅黄紫白目もあやに飾つて模様はスキート、薩珊系と思はれるもの多く、その傳統に西域の匂ひがする。北京附近で見るものは、もとより蒙古民族が主として用ひるもので、且つさう古いものではないが、「火」の歴史とか西域、蒙古の工藝とか圖案とかの研究者にとつて、











邊陬の地では今なほ火打石が使用される

まことに手近な小さい身まはり品である。その一つ一つの異つた形、文様、技法等を眺めてゐると無邪氣なうちに藝術感を持ちつゞけた蒙古人の生活がありありと眼に浮んでくる

この火打石は支那語で火鐮子（ホウリエンツ）と言ふ。財布のやうな革袋の中にはに使ふモグサと石が収められる。袋の一方に取附けられた「スケートの刄」で石の端を擦るやうにして打つと火花が出る。打つ時にモグサを石の端に近くあてがつて石と一緒につまんでゐるので火花はモグサに燃えついて火種になるわけである



測量



架橋工事

鐵道建設

事變以來の日本の努力により北支の水陸交通が著しく面目を改めつゝあることは事實である。鐵道の建設だけを見ても最近開通した石德線をはじめ南部山西の奥深く突入する東潞線など新建設線は八百キロに達してゐる。之等はすべて硝煙彈雨の中に達成された血肉の結晶である。更に軌間の改築、橋梁の補强など諸施設の改良、特に日本人の良心と技術による全般的な經營合理化の實績は特筆すべきものがある。しかし、この地大物博の國土を開拓する爲には現在の五千九百キロの鐵道、一萬二千キロの自動車路、三千二百キロの水運路では未だ極めて貧弱である。試みに北支鐵道の密度を見るに面積百平方キロに對して〇・六キロ、人口一萬人に對して〇・七キロに過ぎず、面積に對しては日本の十分ノ一、人口に對しては五分ノ一で、カナダや濠洲はもとよりブラジルにも及ばないのである。支那大陸では最も鐵道の發達した北支の現狀が斯の通りであり、國內交通の整備如何が北支蒙疆の新建設の成否を左右する根幹であることは議論の餘地がない。特に豐富な地下資源を日本の戰時產業資源として活用するためには、その輸送路の擴充が先決問題である。この水運交通運營の責務を擔ふ華北交通は、あらゆる困難を克服しつゝ山を穿ち谷を踰えて新鐵道の建設を推進せしめてゐるのである



建設成る





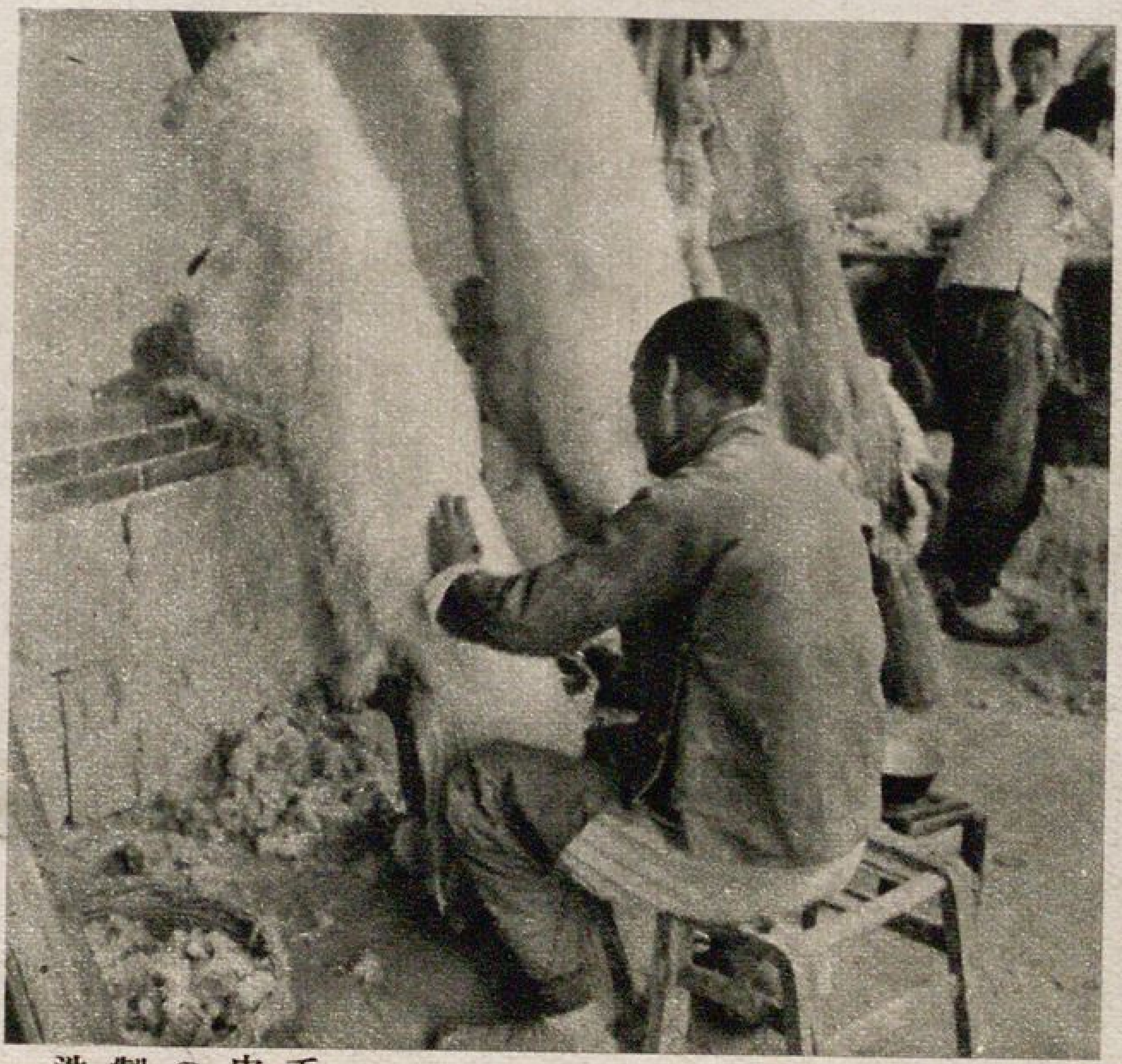
豫讓橋址

順德

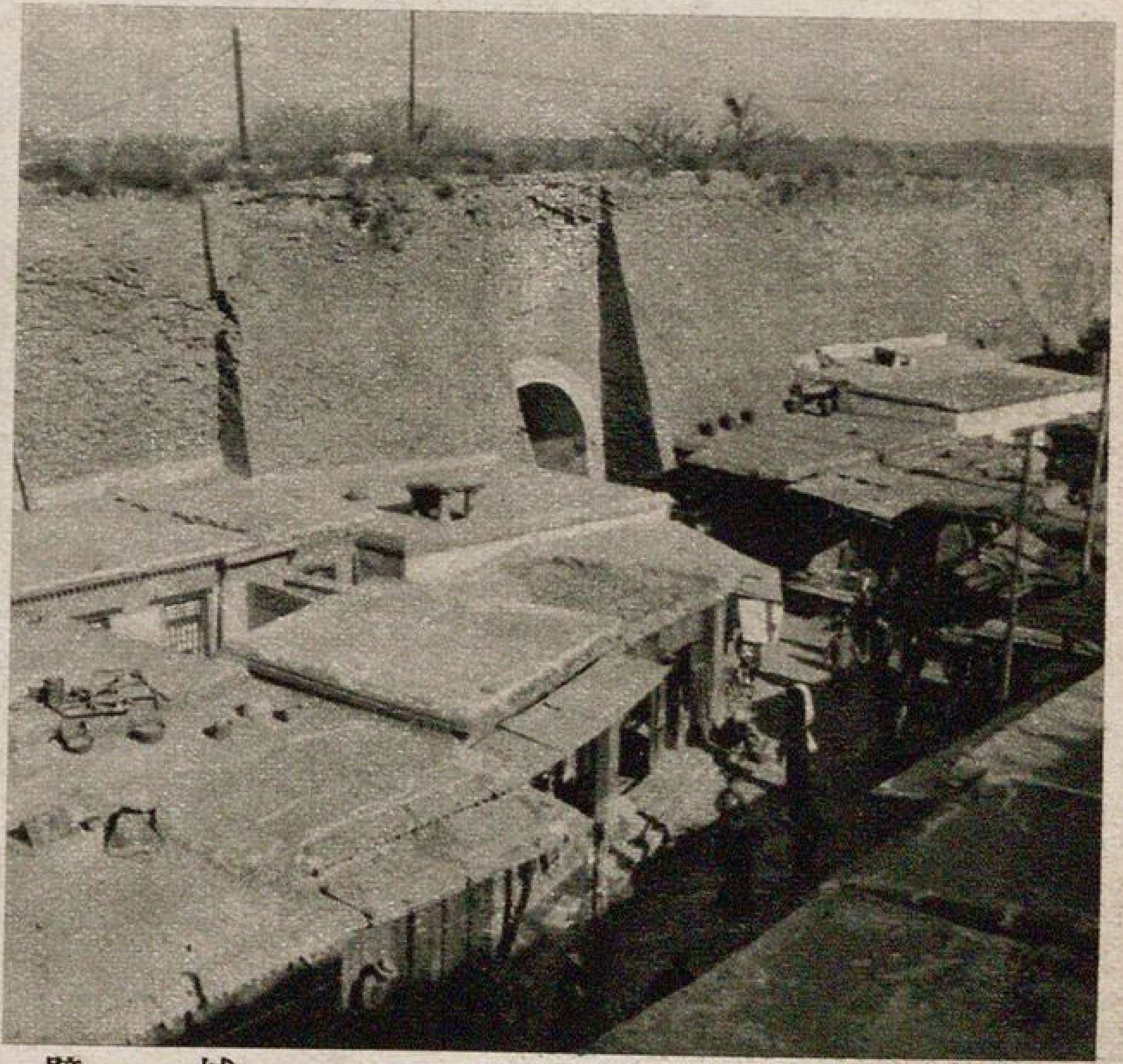
文化二年、大阪龍章堂發行の唐土名勝圖會の卷の六、二十六頁の末尾の行、豫讓橋の說明に「府城の內にあり、又、板橋といふ、豫讓は智伯に仕へたり、智伯、趙の襄子に殺さる。豫讓、此の橋の下に伏し、趙の襄子を刺して、智伯が仇を報ひんとす」とあり、次の二十七頁にうつると、供を從へて馬上ゆたかに橋に差しかゝらんとする襄子と直刀の拔身もて空を突き、片手は、その指間も裂けよと掌を擴げた豫讓が、彼を發見して跳りかゝらんとする供の一人を、橋の下から無念の相貌鋭く睨み上げてゐる姿を主材にした木版畫がある。平福百穗の豫讓の繪もよからうが、この版畫も面白い。豫讓が主の仇を報ぜんとしたのは戰國時代で、今から二千三、四百年前のこと。現在のが當時の橋の儘でないことは勿論であるが、豫讓橋は順德の北門外二粁に在る。

順德は北京から京漢線に依て南下する三八五粁、同鐵道沿線都邑の名門で、春秋時代以來の歷史を有つ。現在人口約六萬、農畜產物、特に毛皮及麻の集散市場として著名である

今事變に於て、皇軍は昭和十二年十月十五日にこの城を陷れた。爾來、同胞の進出日に增し、現在、內地人一千、半島人六百を算してゐる



毛皮の製造



城壁



廟のある大通り



The Tatung Stone Buddhas

大 同 石 佛



第六洞南壁佛傳の浮彫

マカダ國の太子に生れたシツダルタが燕飮、抱擁と、此の世の歡樂のかぎりをつくしてゐるうちに、遁世の意きざし、城の四門を出てみると、病人や、老人や、死人、比丘など色々な人に出遭つた（以上三月號に掲載）

人の世の無情はひしひしと若いシツダルタの胸をおそつた。つひに意を決して、妃アユダ姫の就寢中、宮をぬけ出さうと思案する（左圖、寢てゐるのがアユダ姫、ベツドの下には綵女達が手に手に樂器を持つてゐる）

彼は妻女の寢しづまつたのを待ち、白馬カンダカにまたがつて城門を出ると、天人は請はずして來り、馬の蹄をさゝげ、音もなく太子を空へはこんで行く。（右圖）

さうして、これから山中にわけ入り、もろもろの修業をするのである

北支の水稲

北支の水稲栽培は、中南支或は日本などゝ比較して、まことに貧弱なものであるが、その理由とするところは

一、先づ北支は毎年、降水量が甚だ少い—日本や中南支の三分の一程度—といふこと

二、山地の荒廢によつて、多くの河川が用水時期に水量が不足すること

三、水田に利用されさうな低濕地は、雨季に洪水の被害を受け易いこと

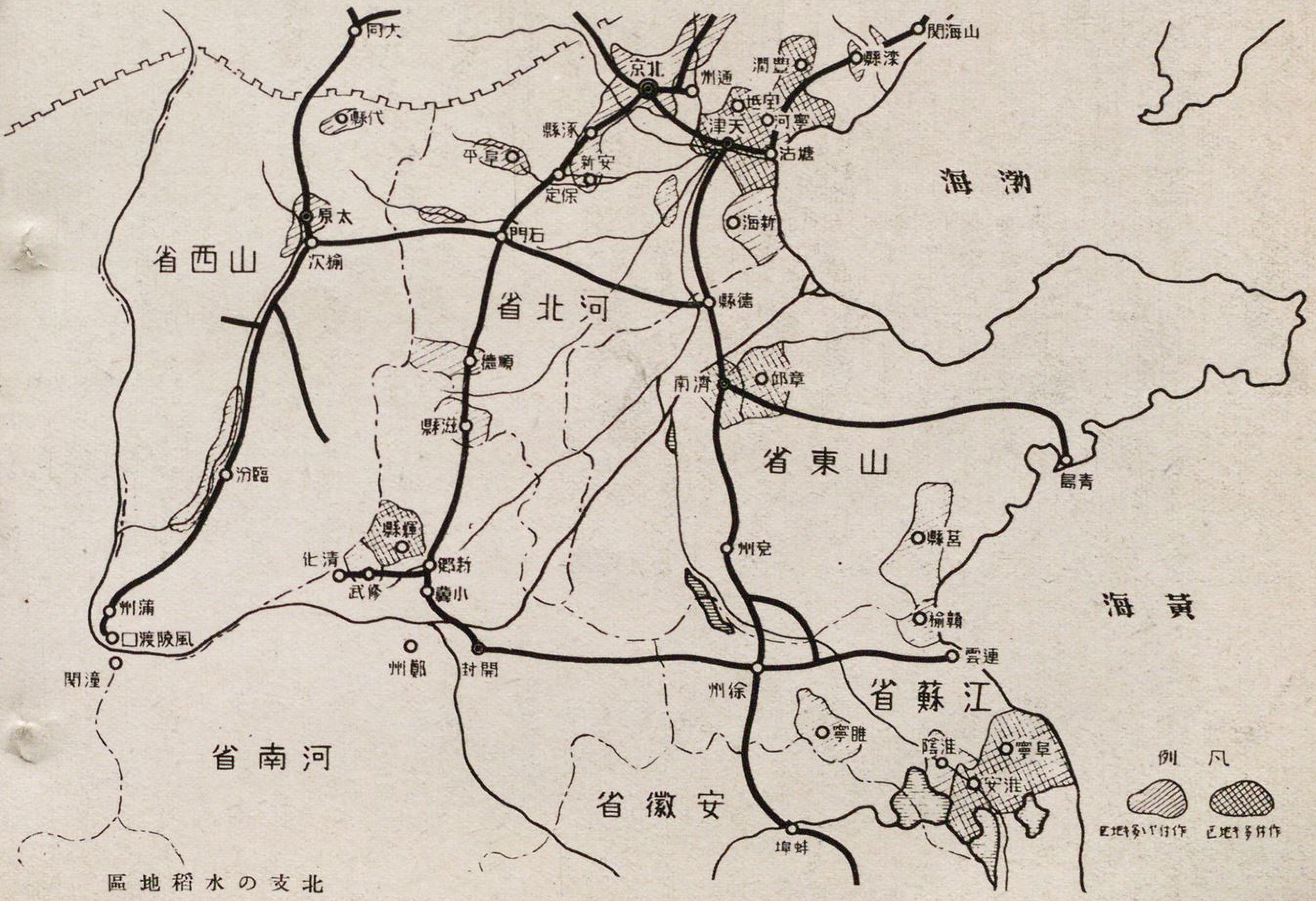
四、地上水は濁度高く、灌漑水として屢〻利用困難な場合があること

五、黄土であることから、比較的透水量が多いといふこと等

Rice Fields in North China



北京郊外南苑



北支の水稲地區

およそ以上のやうな理由で、水稲栽培が普及發達しなかつたと見るべきであるが、それでも京山線背後地の天津、軍糧城、蘆台附近、寶坻、順義地方、京漢線輝縣地方、膠濟線明水附近、隴海線の東部地帶などは、小地域ながら特殊な天惠の水利によつて水稲の栽培が行はれてゐる

これら北支の水稲作付耕地を合せて見ても、僅かに二三萬町步、總耕地面積に對しては一・三%にしか過ぎない。だが、それだからと言つて北支の水稲栽培は、必ずしも悲觀すべきものではなくて、もしも日本の技術をもつてこれを開發するならば、前述の北支水稲の不振の理由などは、敢て重大な支障とはならない。寧ろ北支は水稲栽培の適地と謂へる位で、現に昨年華北交通天津鐵路農場の試作の結果は、陸羽一三二號が反當四石七斗といふ驚異的收量を得、內地の普通收量反當二石乃至二石五斗の約二倍、北支の在來反當約一石五斗の約三倍を示してゐる

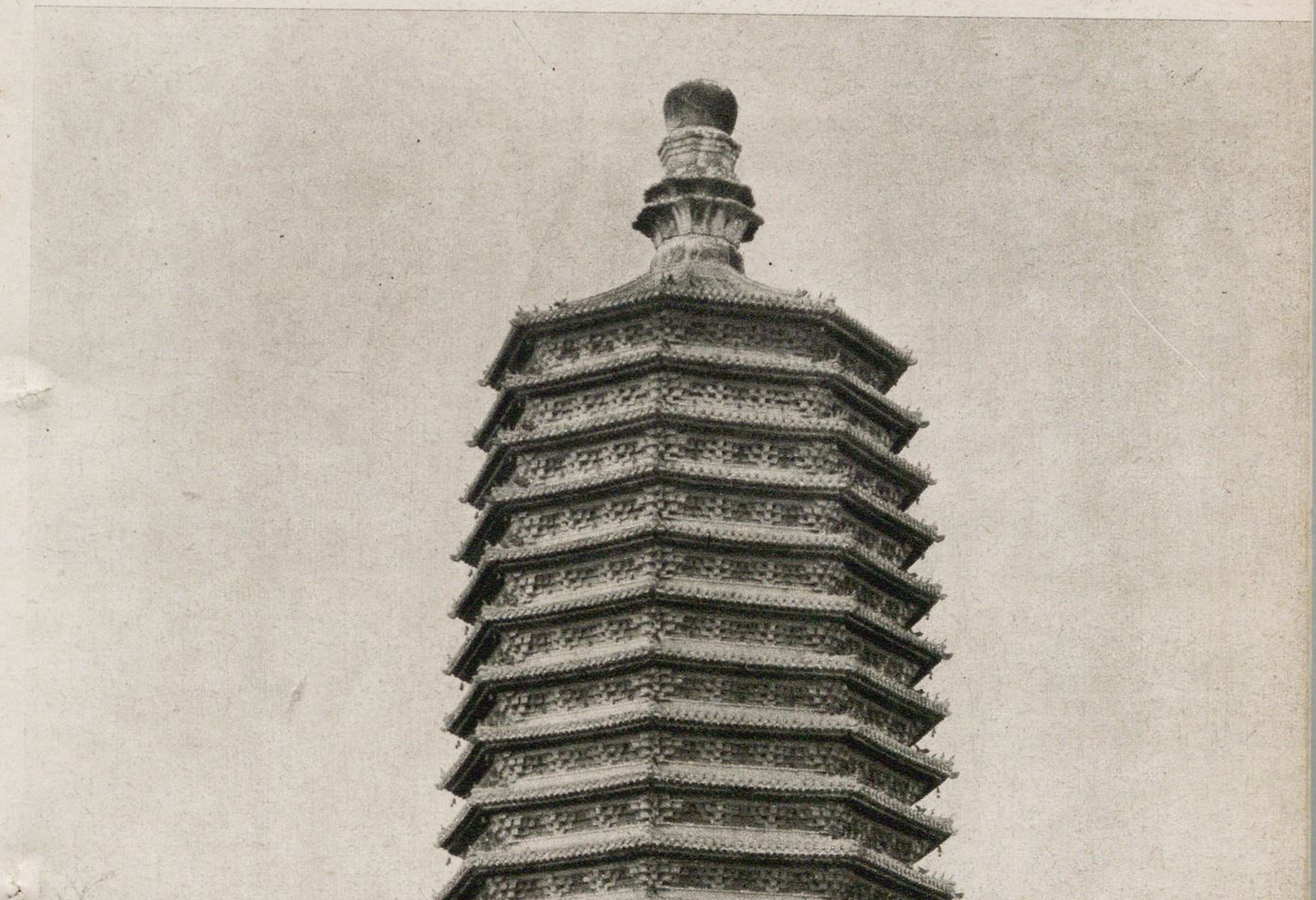
昨今、北支に於ける米穀需給の困難から、日本人の進出に伴つて飯米の現地調辨が緊要必至の問題とされ、水稲栽培が巷間やかましく叫ばれてゐるが、さて將來北支のどの地方に水田が開拓せらるゝかと言へば、渤海沿岸地帶の荒蕪地の土地改良による外はあるまいと思ふ。もしこの地帶への水稲栽培が實現すれば、それこそ百萬石や二百萬石の米の生産はいと易いことである

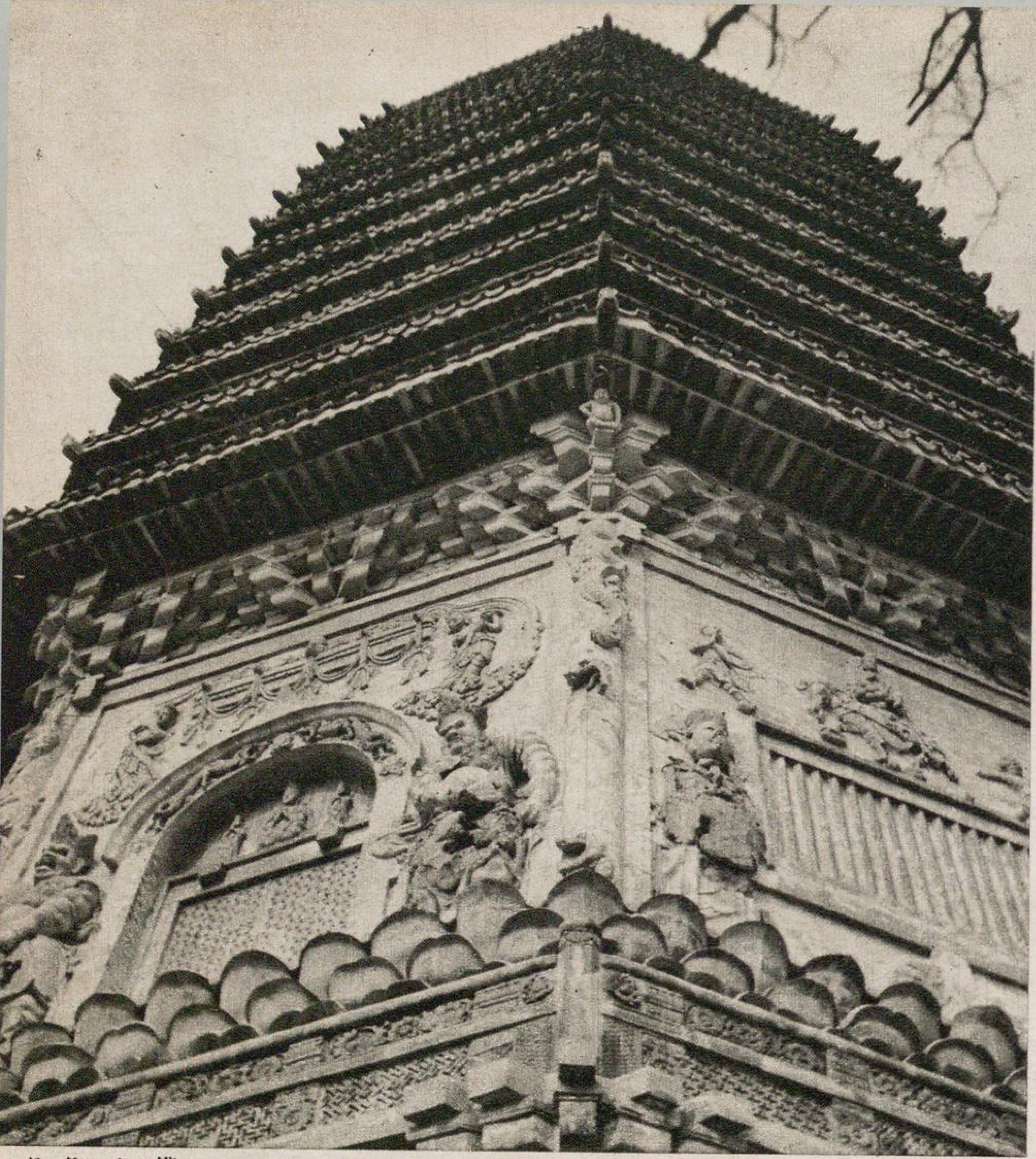


北支の水田

塔 —— 北京城外天寧寺

The Tien-Ming Temple. Peking





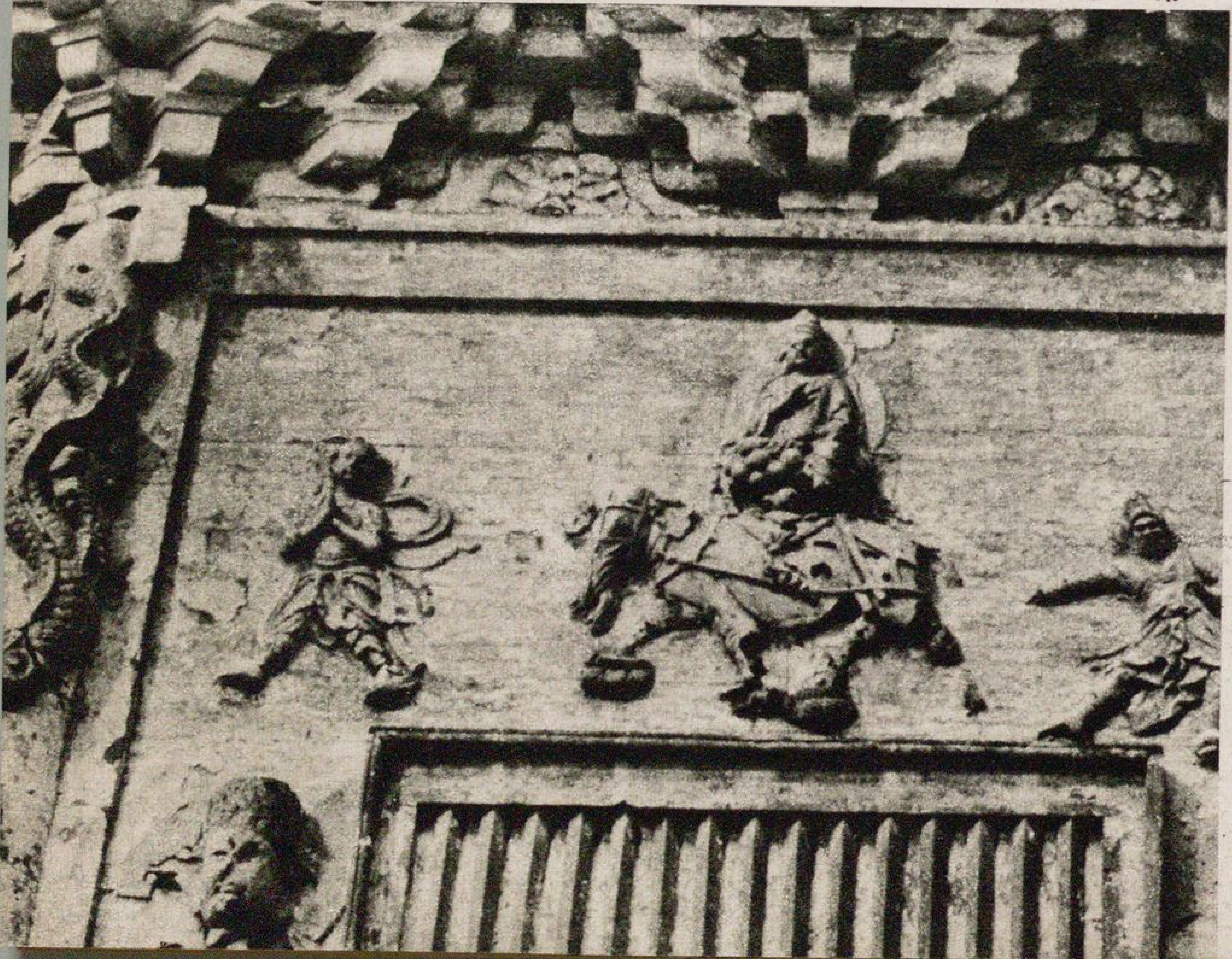
塔を仰ぐ

北京の外城、廣安門を出ると、右手遙かに樹林を拔いて聳え立つ一基の塔が望まれる。これが有名な天寧寺の佛塔だ。この寺の創建は北魏時代と傳へられる。初め光林寺と呼ばれ、隋に弘業寺、唐に天王寺、金に大萬寺などと屢ゝ改められ、天寧寺と稱したのは明代以降のことである

元代今日の北京城が築造される以前は都城がもつと西南に位してゐた。從つてこの寺も其の頃は城内に在つたわけで、往昔は寺運も甚だ榮えたのであつた。今こゝを訪れると、境内を圍む土墻の朱色が際立つて美しい。境内は廣大で建築物の修理なども行屆いてゐる塔は佛殿の北側、略ゝ寺院の中心に位置し、高さは六七十米もあらうか、八角十三層、所謂多簷式である。磚を以て築き、登ることの出來ない構造である。表面には種々の裝飾的な意匠がほどこされてゐて、近づいて眺めると、そのみごとさに驚嘆する。殊に第一層には戸口や窓をつくり、空所には如來や菩薩の像をはじめ、飛天、天蓋或は捲龍等が浮彫され、就中戸口の兩側の仁王像は我が運慶の作を聯想させる許りの雄勁さをもつてゐる

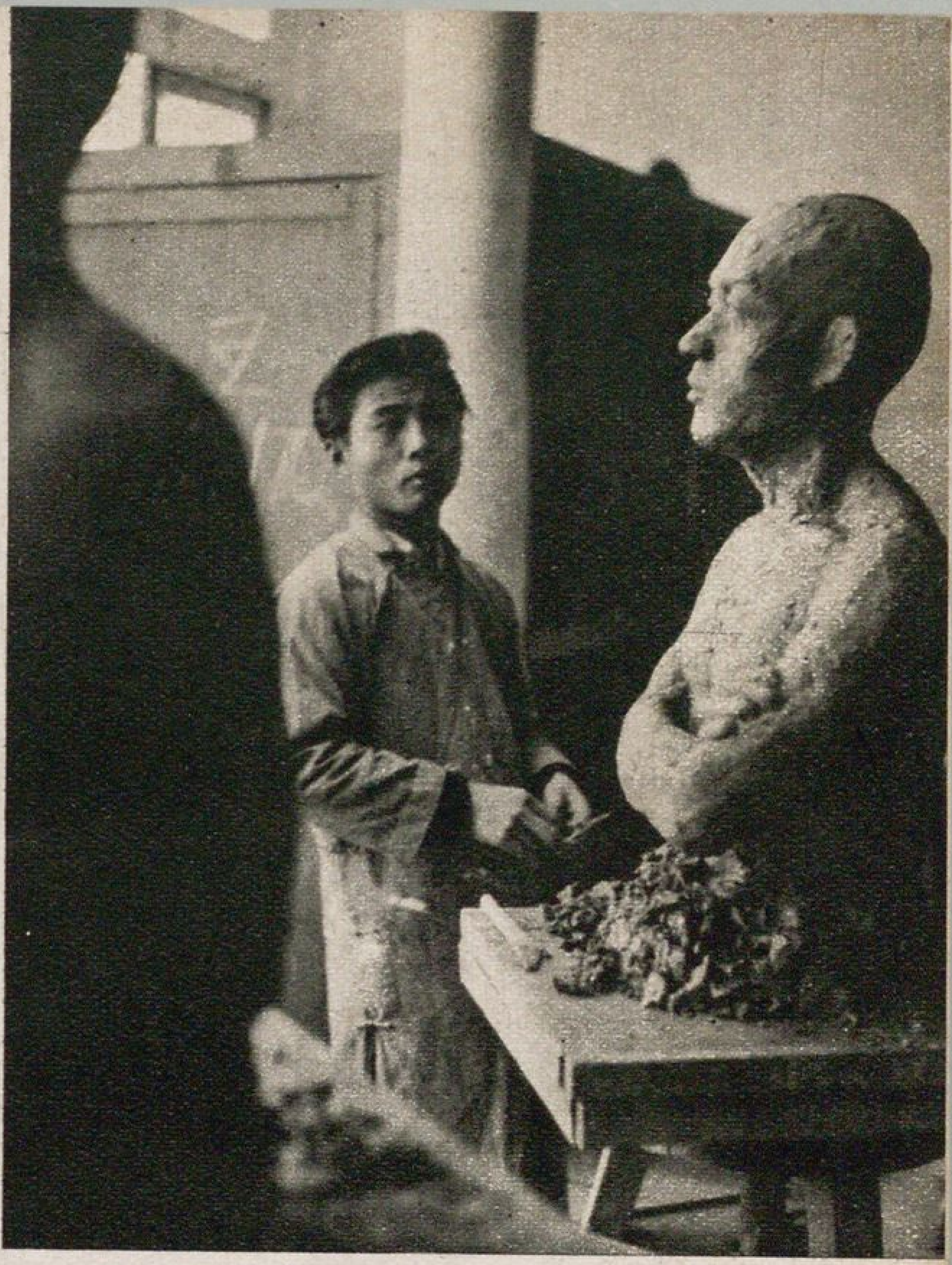
記載に依ると塔の築造は隋代で、名高い仁壽舍利塔の一だとも云ふ。しかし樣式上から推測すると遼代のものとするのが正しい。長い年月の間に幾度かの重修を經、その結果舊時の面影を傳へて居ないところなどもある。屋頂の寶珠の如きが一例で、嘗ては其處に金屬製の相輪が蒼空高くそびえ立つて居たのであらう

第一層の浮彫



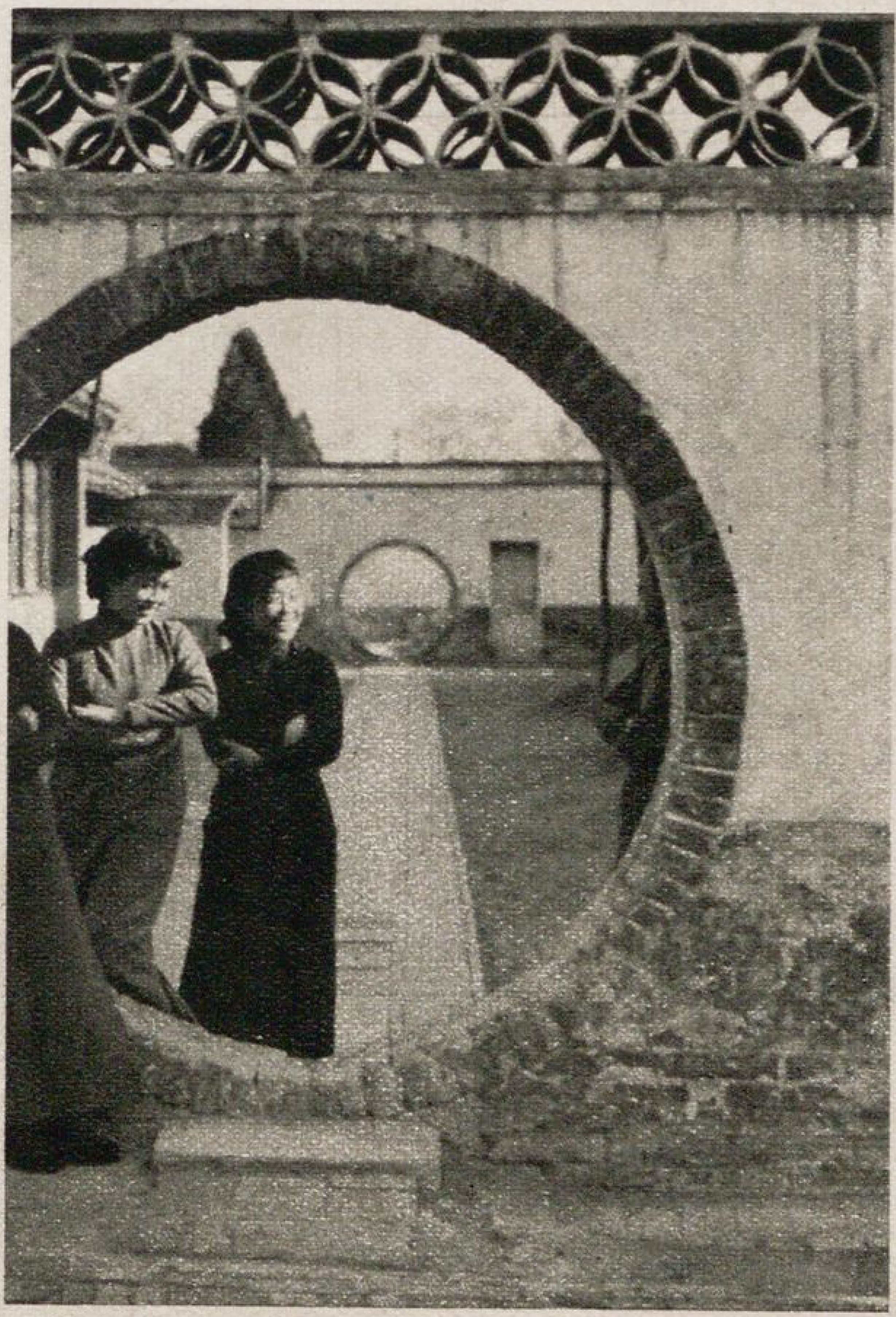
國立北京藝術專科學校

The Peking National
Academy of Fine Arts



塑像科

文化の古都にふさはしく、北京には民國となつてすぐ國立の藝術專科學校が設けられ、大學の一院にさへなつてゐた。それが事變勃發直後、いち早く皇軍協力下に復興された。國畫（從來の支那畫）西洋畫、彫塑、圖案の諸科に分れる。近く工藝科を新設し、また事變前のやうに音樂・演劇をも置かうと計畫されつつある



校庭

圖案科



校長は日本留學出身の王石之氏で、教授の多數は日本美校出であり、日本人教授も數人加つてゐる

學生は約二百名あり、進步した現代的なモデルや靜物寫生研究に熱中してゐる。既に一昨年も昨年も卒業生を出し、年々公開展覽會が開かれ、なかでも藝專學生のお芝居は好評を博してゐる。日本のいきのかゝつた新東亞藝術はまづこの藝專から華北に輝くことだらう



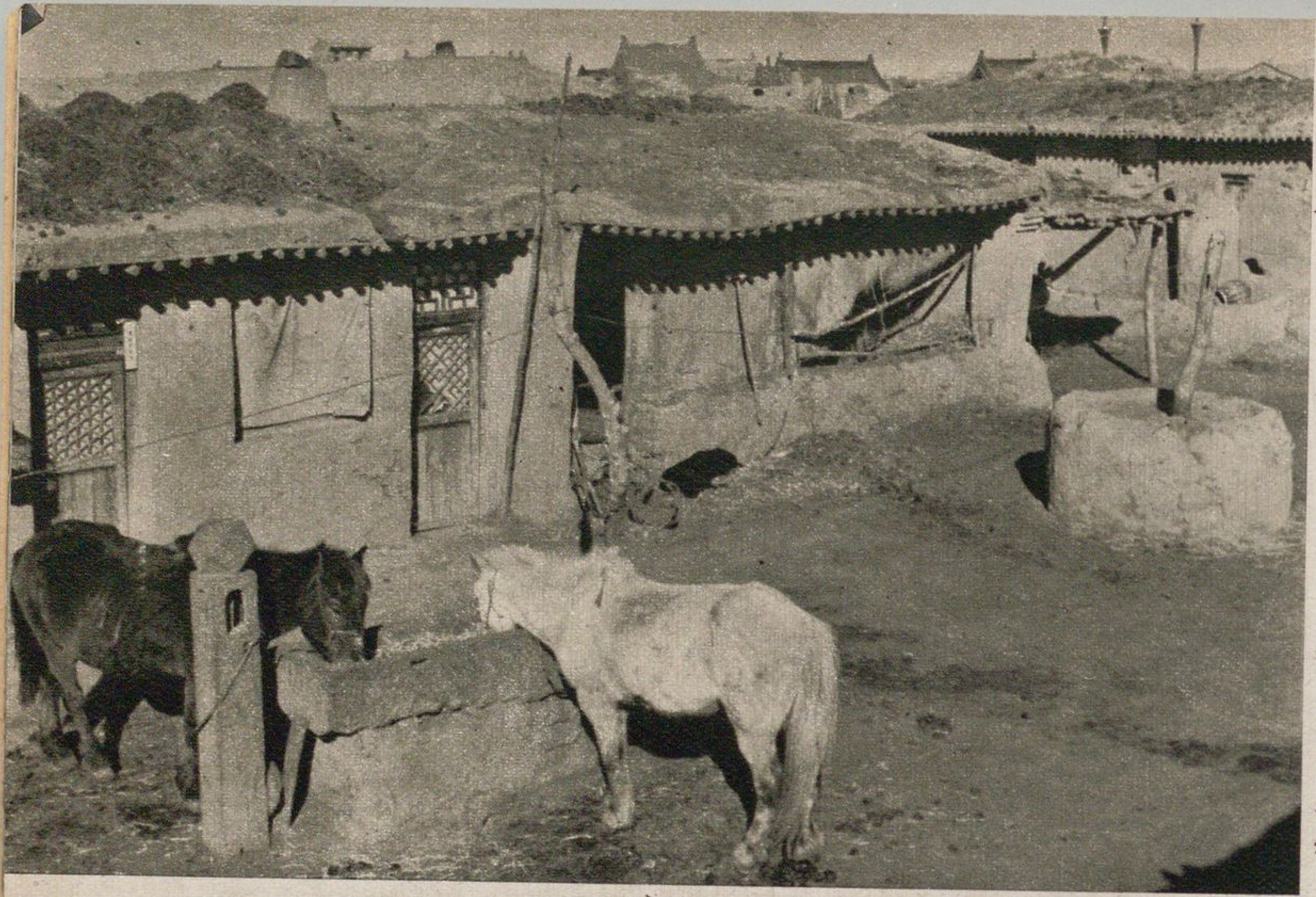
西洋畫科

馬

北支・蒙疆を通じて約百二十萬頭、その中百萬頭が北支平原に於て農耕・運搬に使役され、あとの二十萬頭が蒙疆地域に乘用として飼育されてゐる
蒙古人にとつて馬は實に手であり足であつて彼等の生活にはなくてはならぬ重要家畜である
種類は純蒙古馬及雜種馬で內・外蒙古一帶に亘つて生産せられる、一般に體型矮小で品位に乏しく粗野な感じであるが性質溫順で持久力に富み飼養管理は樂であるから農用としても騾・驢と共に盛に使用されてゐる
騾・驢も亦性溫順で耐久力强く粗食に耐へ飼料の利用率が高いので北支では廣く飼養せられ、黃河流域農耕地帶に於ける不可缺の畜力として重要な位置を占めてゐる。特に驢は農耕のみならず運搬・精穀・製粉・灌漑揚水等にも好適で利用範圍が廣く、支那農家にとつて最も大切な家畜である

Horses





蒙古の馬宿



堯廟祭の馬市

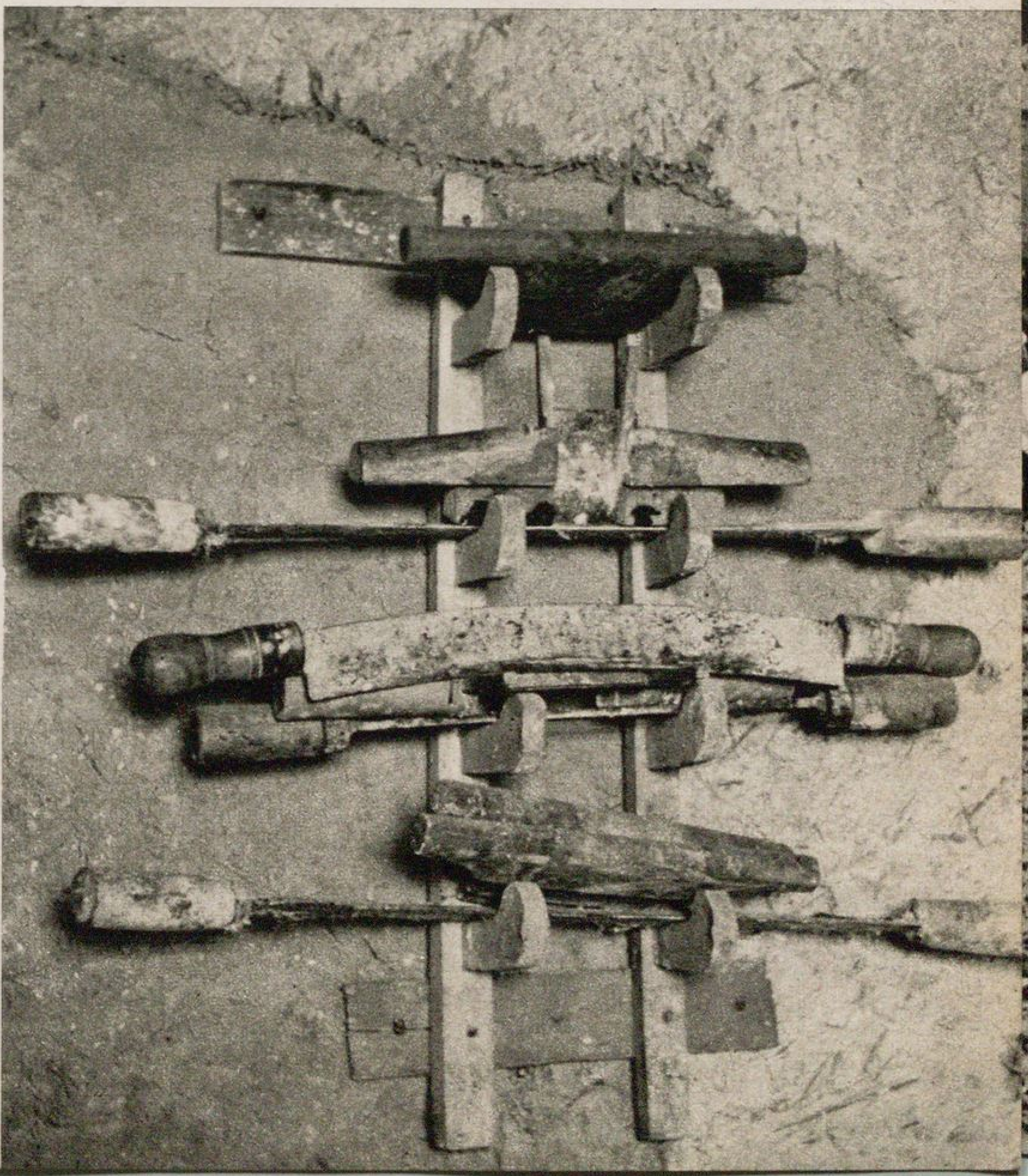
The Tanning of Cow Hides



石灰水から引揚げて乾す



毛をむしつてから石灰水につける



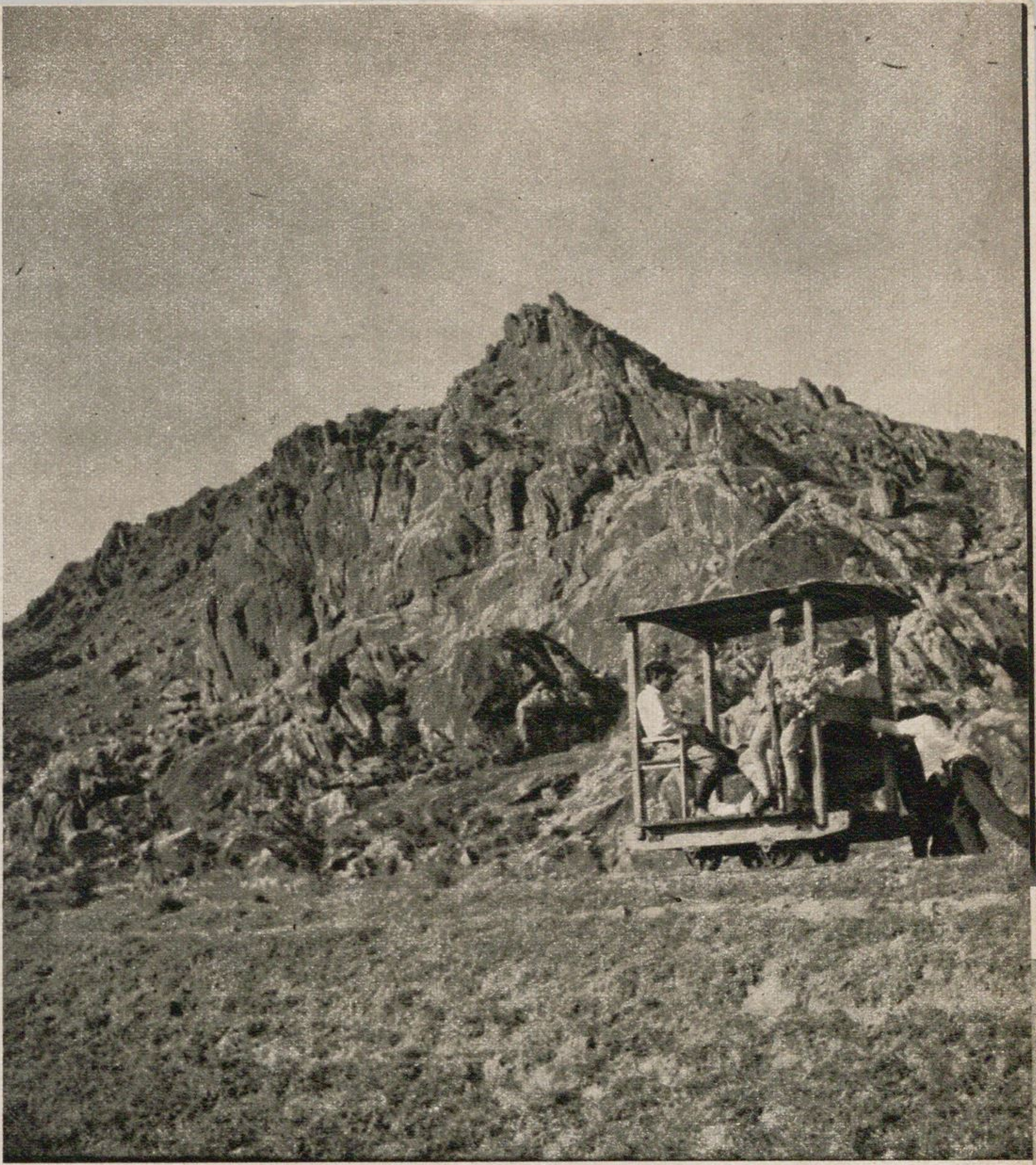
毛をむしる道具

牛皮を革す

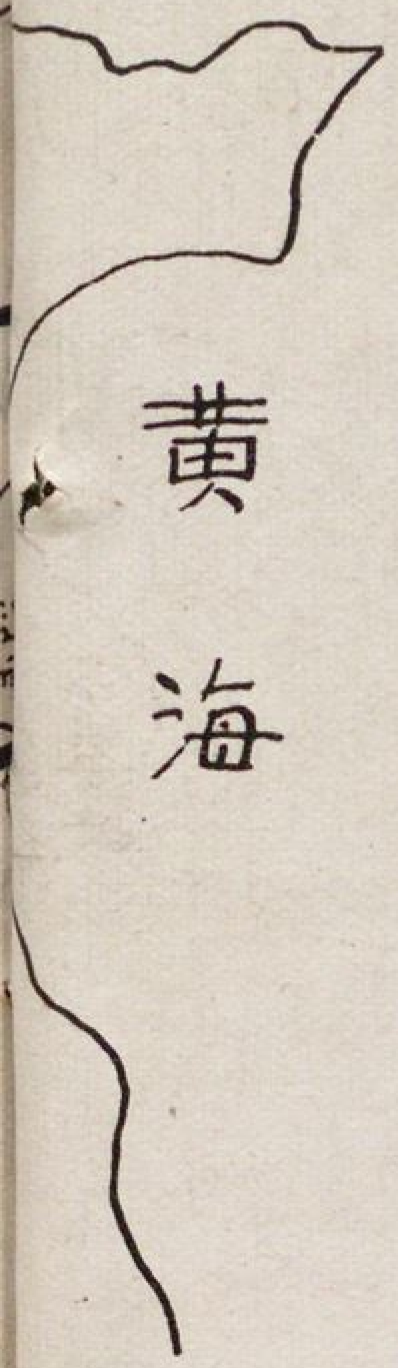
支那の皮革工業は光緒末年の頃、天津に北洋硝皮廠が創設せられたのが皮切りと云はれてゐる。その後京津地方を中心として小規模の工場がかなり出來てゐるが一般に舊式手工業の域に止まり畜產工業として獸毛・毛皮等の下位に置かれてゐる。北支に於ける主な工場は天津に一〇廠、青島六廠、濟南及び山東、山西の各地に二、三廠づつあり製品は殆んど天津・青島の兩港から輸出されてゐるが大體兩港を併せて年額五、六百萬元程度と推測されてゐる



海州の燐礦石



採掘現場にトロリーで赴く



燐礦石は化學肥料として重要な過燐酸石灰の原料である(約九割は燐酸肥料、後の一割は黄燐、赤燐等の工業用に供せられる)

我が國に於ける燐礦石の需要は逐年增加の一途を辿つてゐるが、その大部分は海外よりの輸入に俟ち、我が國に於ては南洋統治領諸島、大島等に僅かの生産があるだけである。然るに海外からの供給は益々困難となつてゐるので玆に海州燐礦石が重視せられるのである

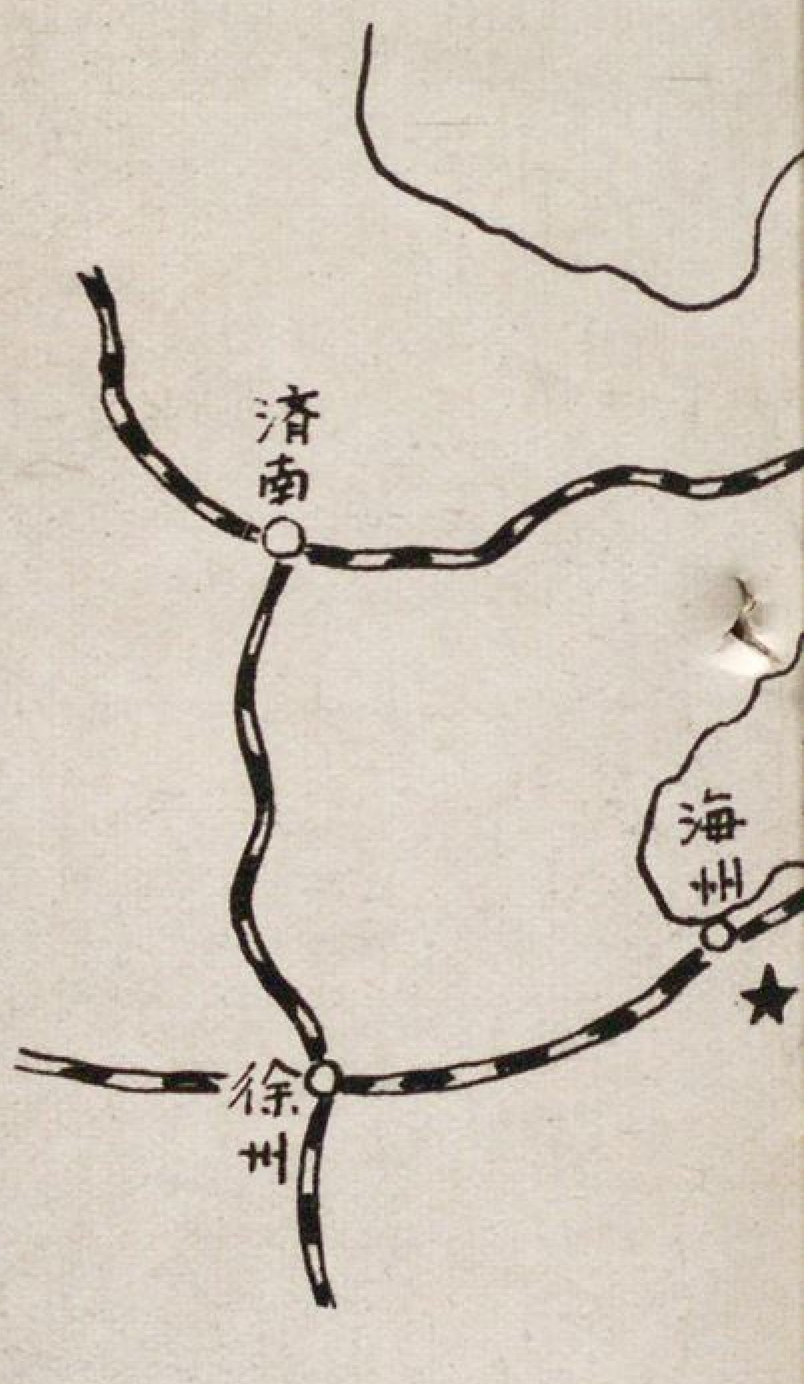
海州燐礦石礦區の礦石埋藏量は相當多數と見積もられ、尙礦區附近の土砂中、燐分を含むものが殆ど無盡藏と云はれてゐる

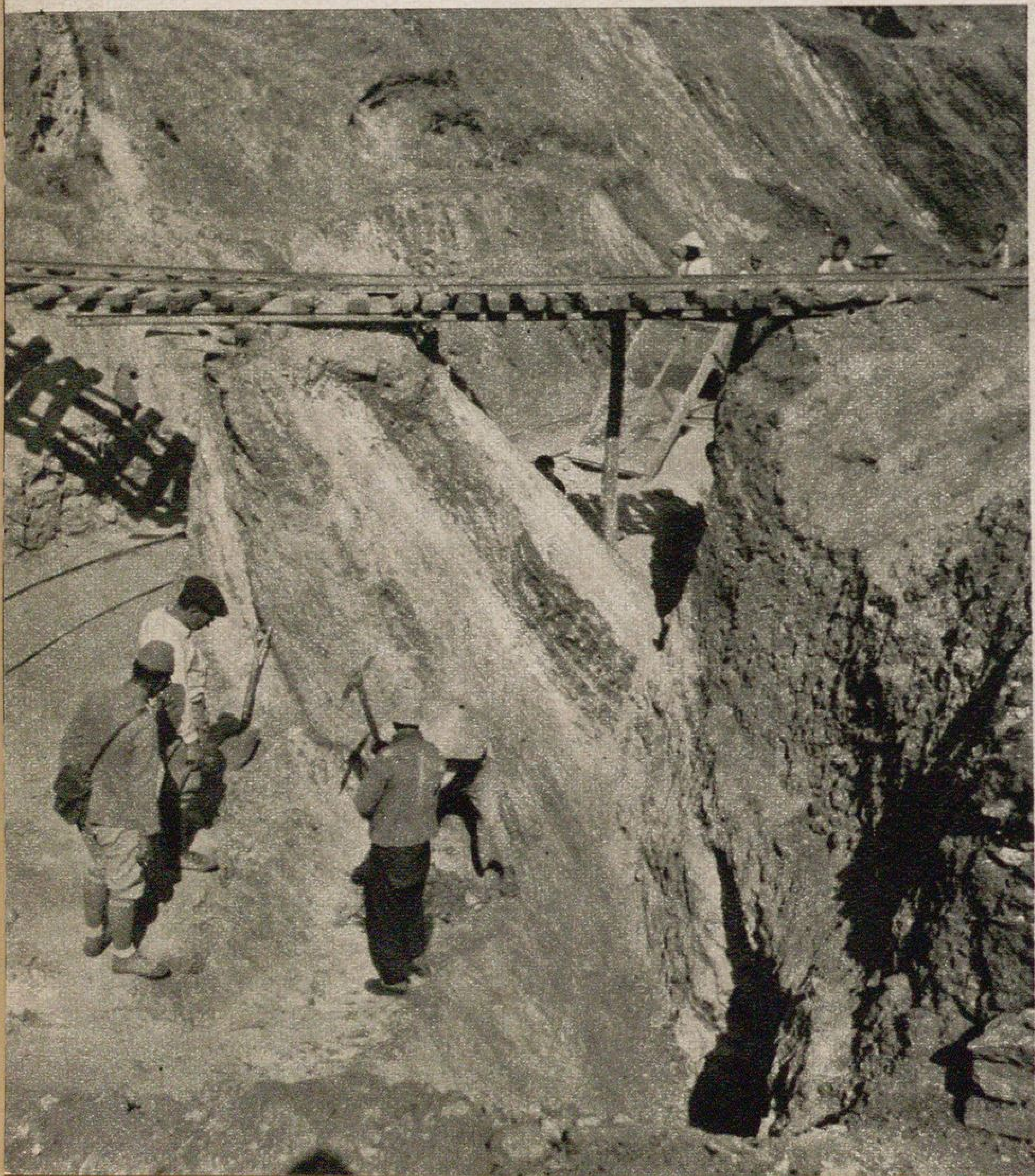
現在發掘は小規模なものであるが、日支最短距離にある連雲を積出港として手近に持つこの燐礦石礦區の將來は大いに期待されてゐる



燐礦石の積替へ

Apatite Mining in Haichow





採掘



The Aronia Flowers

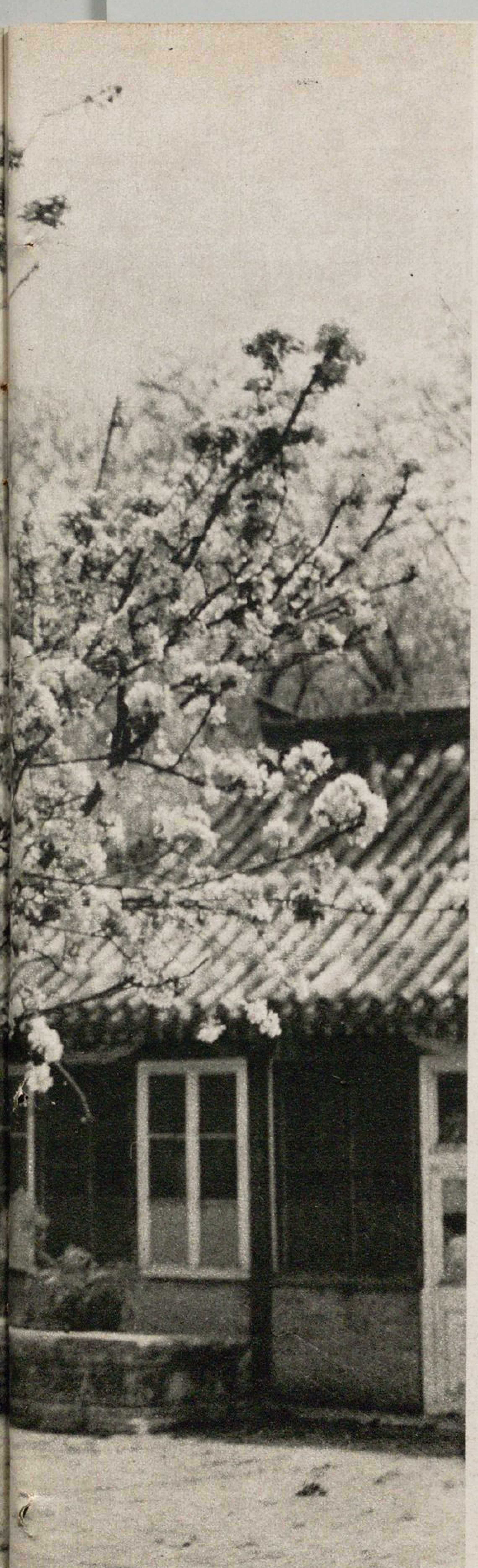
海棠

北支の海棠は、日本に於ける櫻に彷彿たるものがある。ものの本によると海棠のよさは、其花甚豐、其葉甚茂、其枝甚柔、姿態綽約、有脩然出塵之概、新蕊紅嬌、柔條翠淺とあり、唐相賈耽は花中神仙なりと絶讃してゐる。それに海棠は庭中の孤木によく、山野の群生によく、又盆栽としても可憐なものである。海棠は花を賞でるばかりでなく、果實は蜜餞（ミイツェン）や糖葫蘆（タンフウル）として捨てがたい風味をもつてゐる

海棠のフルーツケーキ、それだけでも
何んと珍なるやである
さまざまの果物の蜜餞（蜜漬）は、北京獨特の果物菓子だが、そのうちでも、蜜で中まですき透るやうになつた琥珀色の海棠の實は、フルーツケーキの優れた一美術品といつていゝし、またその齒ざはりの柔かく、そして甜味と酸味のいとも程よく調和された味ひも誠に申分がない。ピンポン玉より一廻り小さいこの蜜餞海棠を、小皿に二つぐらゐのせて、客に進めるなんて、凡そ茶菓の最もしやれたものであらう。殊にこの海棠に限り、妻楊子をさしたやうに花梗が一本きつと附いてゐる姿はいちじるしく整美觀を添へる

蜜餞海棠のほか、これも北京名物の糖葫蘆――いろいろの果物を竹串にさして砂糖を煮つめて飴狀にしたものをまぶし、ギヤマンがけの樣にした果物團子――にも亦た海棠の實が使はれてゐる。これは、フルーツケーキのいかにも北京らしい藝術品で、蜜餞海棠よりは稍々酸味が濃く、甜酸つぱい味を戀になぞらへるならば、これこそ切實な初戀の味といへよう

また海棠の實をごく薄く切り、それを日蔭干しにしたのを、砂糖と一緒に一摘み茶碗にいれ、その上に熱湯をそゝぎ、少し冷えた頃に啜り且つ喰べる。簡單ながら至極美味、北京の子供たちの悦ぶ間食の一つである。これを海棠片といふ



北京の院子（內庭）にて




無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！
新生國策イリヂュウム
白金ペン付
クラウン万年筆
書きよく
體裁優美
構造堅牢
流線型
北京・藤花
大阪 株式會社 澤井商店

北支の地下資源開發の將來

堀内一雄

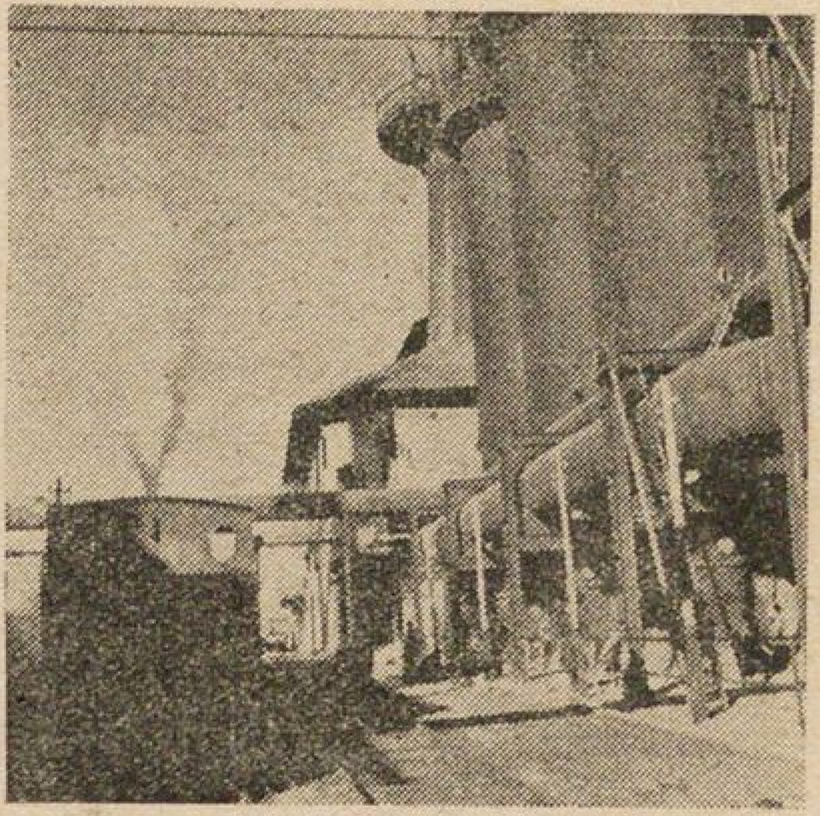
歴史上、人類が地下資源を高度に開發利用し初めたのは、極めて最近のことである。北支のやうに重工業、化學工業の發達が他の文明國に較べて著しく遲れた處では地下資源に對する需要が少く、從つてその開發は極めて幼稚な狀態にあり、石炭の如く豐富な資源が外國の資本に依つて稍〻大規模に開發された以外には殆ど見るべきものがない。たゞ北支では炭田の附近に石炭は勿論、石灰岩、鐵、硫化鐵、粘土等が一緒に產するため、炭田を中心とした小規模の工業が分散して發達し、これ等資源に對する簡單な開發が行はれてゐる。其他にも、金鑛のやうなものが或程度開發されて來たが、その開發工程はまことに遲々たるもので、從つて之等地下資源に對する科學的調査研究も亦非常に遲れてゐたのである。

地下資源の量に較べて需要が極めて少く、且つ利用範圍が狹いうちは、調査研究が進んでゐなくても差支へは起らなかつたらうが、現在の北支は東亞共榮圈の重要な地位を占め、その有する地下資源は高度に開發利用されなければならない立場にあるのであつて、今迄のやうな非科學的の狀態のまゝでは、到底この目的は達せられないのである。

今迄知られたところに據れば、北支の重要地下資源は第一に石炭である。その埋藏量は千數百億瓲と謂はれてゐる。この數字は必しも正しいとは云へまいが、兎に角莫大なものであることは確である。然し石炭がそのまゝ單なる燃料として利用された時代はいざ知らず、現今では製鐵用コークス原料としても重要であるし、液化用にも使はなければならないのだから、如何に石炭としての埋藏量が多くても、何處に何ういふ狀態で、何ういふ工業に適する石炭が、何瓲在るかゞ判らなければ石炭に就いては心配なしと斷言することも、又合理的な開發利用方策を講ずることも出來ない。石炭に次ぐ資源と目されてゐる礬土頁岩(硬質粘土)は、以前北支では陶器の原料、或は耐火煉瓦用として少量使用されてゐたが、今ではこれからアルミニウムを造ることが工業的に成功し、又高級耐火材料としても不可缺の資源であり今後益〻需要の增大すべきものであるが、今迄の調査では一部を除いては用途別の埋藏量が殆ど判つてゐない。これでは多くの需要に應ずるための開發方策は樹てられない。其他の資源として鐵、タングステン、滿俺、ニツケル、銅、鉛、モリブデン、金、雲母、螢石、石膏、石綿、黑鉛、重晶石、滑石、硫化鐵、粘土、石灰石等色々あるが、これ等に對する今迄の支那側の調査は、極く稀には稍〻詳しいものもあるけれども、大部分は極めて簡單で信賴するに足らぬものか、或は單に產地のみ判る程度のものであつて、到底今日の我々の目的を充し得るものでない。かういふわけで北支の地下資源を現在の新しい立場から見ると、その眞相は殆ど判つてゐないと云つても過言ではないのであつて、このまゝで將來の開發方策を云々することは出來ない筈である。

地下資源といふものは、大部分が地下に埋れてゐて、その一部が地表に露出してゐるか、或は全く地下に隱れてゐるものであつて、簡單な調査を行つただけで總てが判るものではない。アメリカが今日世界第一の產油國として全世界產油の略六割を產出してゐるの

内容



石景山製鐵所

も、決して石油が自然に湧いて來るわけでは無く、進步した科學的調査、特に第一次歐洲大戰直後から、優秀な物理探鑛の器械及技術を採用して、盛んに油田の發見に勉めた結果であり、又ロシアのやうに地下資源の豐富な國でも、今尙每年巨額の費用をかけ、多數の技術者を動員して、調査研究を實施してゐるといふことである。

北支も、現在のやうに地下資源に對する需要が急激に增大した場合には取敢ず在るものを出來るだけ多量に開發することも必要ではあるが、今後益〻增大する需要に應じ得る方策が、樹てられなくてはならないのである。眞に計畫的な地下資源の開發は、科學的の調査研究を基本として行はれなければならない。そのために、我國でも事變前、既に北支の地下資源の調査を實施したことも屢〻あり、又事變後今日に至る迄、各機關がその調査の爲に努力してゐるのであるが、これは今後いよいよ必要であり、而も一日も早く東亞を他地域の水準迄到達させるためには一層眞劍な努力が必要である。そして若し我々が北支地下資源開發の必要性を眞に認識し、優れた技術を以て調査研究を行つたなら、北支の地下資源の實態が明にされるばかりでなく、新しい資源、新しい產地が發見され、全體として量に於いても、種類に於いても北支の地下資源が增加することは斷言して誤りないと思ふ。既に事變後今日に至る迄の間に行はれた調査の結果、新しい產地が發見されたこと、新しく資源としての價値が認められ、或は今迄知られてゐたより優れた價値を有することが明らかにされたこと等、數例に止まらないのである。

このやうに、科學的の調査研究により、地下資源の性質や狀態が正確に示されて、始めて計畫的な開發が可能になるわけであるが、北支では調査がおくれてゐたばかりでなく、その開發利用の方面も非科學的であり、無計畫、無秩序であり、又北支全體の地位が、今事變を境に全く更新されたのであるから、實際の開發に當つても、根本的の立て直しが必要とされるのである。その爲めには、調査研究の結果は、更に科學的に、經濟的に、そして國策的に、充分檢討されなければならないと思ふ。

地下資源に對して無盡藏といふ言葉が使はれることもあるが、實際は地下資源程限られた資源はないのである。限られた資源を以て、今後益〻增加する需要に應ずるためには、余程愼重な考慮が拂はれなければならない。

今迄の北支は、開發に直接必要な採鑛技術は幼稚であり、進步した選鑛法製錬法は採用されず、且つ交通、輸送網の發達は極めて貧弱であつたため、地下資源は非常に冗にされ、或ひは、全然利用されないまゝに放置されてあつた。

例へば石炭の採掘も大部分のものは無秩序であり、從つて可採率低く、且つ掘り易い所を選んで亂掘するため、將來多量の採掘をする場合に障害を來すことが多い。又金鑛の選鑛、製錬法等も原始的で、金の實收率は甚だ低く殘りは遺棄してしまふのが通例であるが、これらの點は採鑛法、選鑛法、製錬法の改善に依つて、容易に改め得ることである。又進步した選鑛、製錬法を採用したなら、今迄品位の點で殆ど資源としての價値を認められなかつたもの、例として冀東地區に多量に存する貧鐵鑛の如きものも、立派な資源として利用し得る可能性がある。又北支では鉛、銅、硫化鐵等の資源は少量の產地が散在し、その上交通不便のため全然顧みられないか、或は工業的の價値は認められてゐなかつたが、將來交通の發達により、或は動力の供給により、巧みに綜合開發することも亦工業化することも不可能ではないと思ふ。又現在の新しい立場から、今迄の無統制な資源の使用を止め、資源の特質を生かして最も適する所に最も適する資源を使用させ、他に濫用させないやうな統制も必要である。

北支の地下資源に對して、開發利用には容易なもの、利益は高いものを期待して、努力を示さなかつたなら、今後の開發も、今日迄の狀態よりたいした進步は望まれないであらうが、若しも地下資源の性質を眞に認識して、各機關、各部門が、熱意と努力を以て協力したなら、北支地下資源開發の將來は洋々たるものがあり、又かくすることが、東亞防衞の上からも、東亞繁榮の上からも必要であると信ずる。

（筆者は滿鐵北支經濟調査所員）

農民と主食物

みづの・かほる

北支農村の貧窮のよつて來たるところは、先づ何よりも耕地の不足と、天災の頻發にあることは前にも述べたことであるが、今回はその貧窮な農民が何を常食としてゐるか、に就いて物語つて見よう。

北支に於ける食糧作物の生産は、北支自體の需要をさへ滿たすに足らないで、滿洲から雜穀類を、中南支から米穀を、海外から小麥並に小麥粉を移輸入してこれを補つてゐるあはれさである。しかし、これらの移輸入穀物は、殆んど都市の消費に充當されて居り、奥地の農村だけに就いて見れば、たとへ足らうが足るまいが、食糧穀物は自産自給してゐることになつてゐる――但し小麥は、前に「北支と小麥」のところで述べたやうに、北支に生産されたもの、大半は都市へ搬出されて、都人士の食糧として消費される――。

北支の食糧穀物としては、粟、高粱包米（北支では玉蜀黍を包米といふ）の三大作物が擧げられる。その內粟は作付步合最も高く、高粱が二位で包米が第三位である。この他小麥は別として、黍、稗、水稻、陸稻、大麥、燕麥蕎麥などあれど、前三者に比すれば、これらの食糧穀物は、作付に於いても産量に於いても遙かに低位にある。

そこで北支の農民の主食物、卽ち常食としてゐる穀物は何かと言へば、この三種であると言つてよいのである。たゞ何分廣い北支のこと、土質により地勢により氣候により、この三種の作物の作付割合は地方によつて一樣でない。例へば比較的高燥な地方は粟の作付が多く、從つてこんな地方には粟の消費が多い。又渤海沿岸の低濕な地方へ行くと、高粱の作付が多く、從つてこの地方には高粱食が多いといふことになる。又北京背後の農村には、包米の作付が割合多くて、この地方の農民は包米食が多いといふが如きである。

さて、この三者の內、食糧穀物としての品質と價格の點から言へば、粟が優れ、高粱と包米はそれよりずつと落ちて、兩者は相伯仲してゐる。そこで粟を多く食ふ農家は比較的餘裕のある農家であり、高粱や包米を食ふ農家は最も貧窮な階級と見ればいゝ。貧窮な農家は、高價な粟の自家消費を出來るだけ避けて、これを手離し現金に換へようとする。從つて三種の穀物の內、都市へ出廻る率は粟が最も多い。

北支では、この三種の穀物を用ふるのに、日本や朝鮮滿洲に見るが如く粒食（穀粒をそのまゝ炊ぐ）としないで粉食（穀粒を碎いて粉となし後これを炊ぐ、粒食と言ひ粉食と云ふは、正しい言葉でないかも知れないが、こゝでは便宜上かう呼ばして貰ひたい）とするといふことが、極めて興味を引くことである。しかも粒食の場合と雖も、殆んど飯に炊ぐことなく粥とされるといふことも、北支に於ける農民の主食物のとりかたの特色である。

筆者は、北支に於けるこの粉食の慣習は、一つは不足せる食糧穀物を、最も經濟的に攝取しようとする長年の經驗から案出されたものだと考へるのである。先づ粉食は、各種の穀物を簡便に混合調理し得ることによつて、味を整へ、營養價を高めることが出來るといふ特點がある。それから又、粉食とすることによつて、粒食の場合より燃料が著しく節約されるといふことである。かの滿洲に於て高粱飯を炊ぐに如

何に長時間を要し、これに消費する燃料の如何に多きかは知る人ぞ知るところである。北支の如く燃料を供給する山地に乏しく、分配過少な耕地から生産される作物の莖葉藁稈を、飼料と肥料と燃料とが三つ巴になつて奪ひ合はなくてはならない現狀に於いては、このことは決して輕視するわけには行かぬ。

しかし、北支に於ける粉食の眞價は何んと言つても穀皮の利用、攝取にある。卽ち北支農村の一部の富農は、粟や高粱を精白して後に製粉したものを用ふるのであるが、貧農はこれを精穀することなく、玄穀のまゝ穀皮とも製粉して了ふ。皮だけならとても喉へも通らないが、穀とともに製粉し混合されたものなら、我慢すれば結構食へるのである。

高粱を皮ごとの玄穀で製粉すれば、精白高粱の場合より、重量に於て二―三割增、粟は同じく六―七割增となる。もとよりかうした皮ごとの玄穀々粉は味に於いて劣るは勿論のこと、營養價に於いても多少は落ちるであらうが――或は落ちないかも知れない――、貧農の常食としては充分である。これをもし粉食とせず粒食となす場合、粟や高粱の玄穀をそのまゝ炊いだのでは、流石の粗食に堪へる北支の農民でも食へぬであらう。高粱や粟を粒食とすれば、精粗はともかく精白の操作は絶對に必要なもので、さうなると高粱や粟の穀皮は、食糧としての利用が不可能となるわけである。こゝに粉食が穀皮の利用卽ち食糧節約の上から起つたものであることが判然する。この事實こそ北支農村に於ける粉食の價値が一層高く評價されなくてはならぬと思ふ。

さて、粉食としての用ひ方には、糊狀の汁としてすゝるもの、日本の團子狀となすもの、薄い燒き餠とするものなど、地方により季節によりいろ／＼と工夫されてゐる。この內でも糊狀としてこれに野菜や木の芽などを投じたものが、最も節約した經濟的な食ひ方でこれは貧農に用ひられ、又多の農閑期の勞働の輕い時には、一般の農家に於いても用ひられる。

穀粉は多くの場合、他の穀粉と混合して用ひられる。時には二種以上のものが混合される場合もある。混合の相手は小麥粉、高粱粉、包米粉、粟粉、燕麥粉、蕎麥粉等である。尙この穀粉には、多くの場合大豆粉が一、二割位混合される。この大豆粉は粉に甘味をつけ、團子として蒸す場合よく膨脹させ、又大豆粉を混ずることによつて、冷えても割合硬くならないといふ役目をする。更に營養價値に於いても大豆粉の混合は、極めて合理的のものであるが、しかしこんな營養成分の點まで農民が思慮を巡らしてやつてゐるかどうかは、一寸うたがはしい。

滿洲は大豆の世界的な產地であるが北支も亦、作付面積に於いても、產量に於いても滿洲に次ぐ大豆の產地である。これが滿洲大豆のやうに特產として海外に輸出されないのは、一つには北支の主食物たる粉食への混合に夥しき大豆粉が消費されるからでもある――これは大分古い話ではあるが、滿洲大豆が世界を風靡した時代、目をつけたのが北支の大豆、統計を見ても北支の大豆の產量は莫大なものだと、わざわざその道の關係者が北支へ渡つて調べたものである。なるほど北支に來て見ると、大豆の作付は多い。從つて產量も多いであらうことは確かである。が、さてその大豆が地場にどう消費されるか、滿洲とはすつかり勝手が違つて都市へは一向出廻つてゐる氣配がない。と言つても當時の北支のこと、奥地へ這入つて調査するわけには行かず不思議を抱いたまゝ歸つて來たといふのである。しかしこの不思議を解くには、一つは前述の如く大豆が大豆粉に化けて他の穀粉と混合され、重要な食糧作物として農民に自家消費されてゐること、もう一つは滿洲に於ける家畜の濃厚飼料が、主として高粱であるのに對して、北支では、食糧穀物の不足から飼料として大豆が割多く消費されてゐることにあるのである――。

筆者は尙最後に、北支の粉食を三思したいのは、北支に於ける農民が、食糧不足の下に粗食に甘んじてゐながらあの山東苦力の如き偉大な體骼の持主が出來るのは、もとよりさうした種族でもあるのであらうが、この穀粉の混合食と、穀皮の攝取が營養上何等かの關係があるのではないだらうかといふこと、粉食が又生理的に言つても消化吸收し易く、極めて合理的なものであるといふことに因るのではないかといふことである。日本に於いても食糧不足をかこつこの際、北支の農民のこの粉食が吾々に何ものかを示唆してくれるのではないだらうか。この北支農民の粉食が、徒らに米麥の粒食を固守し、しかも僅かに半搗きとか七分搗きとかにすることによつて、やれ食糧節約だ、やれ米麥の合理的調理だとか言つて得々としてゐる吾々日本人に何か他山の石たり得るものがないだらうか。（筆者は華北交通資業局參與）

黄河の三險

小林　德

流域面積や本流の長さから云へば世界十大河の中に算へられなければならない黄河であるが、水運といふ觀點から見るときその價値は貧弱極まるものである。そこに「中國の患」としての黄河がクローズ・アップされる。揚子江では全長五二〇〇粁のうち江口より二八四〇粁の四川省屛山縣城まで汽船が自由に航行してゐる。しかも漢口までは（江口より一一一一粁＝以下江口よりの距離）夏期一萬噸級の軍艦や外洋船が埠頭に横付けするし、減水期でも吃水十二呎までの汽船は何の支障もなく出入港してゐる。宜昌までは、（一八二四粁）千六、七百噸の汽船が、また重慶までは（二四八二粁）千噸內外までの洋船が通つて居り重慶より屛山までは百噸以下の小蒸汽なら通航出來る。その全長の五割五分の區間に汽船を通じて居るのに對し黄河は汽船は勿論、小蒸汽すら通つてゐない、唯包頭、寧夏間に小蒸汽とプロペラ船の試運轉が行はれたことがあるが未だ定期運航の實現までには至つてゐない。

黄河に汽船の航行出來ぬ原因は種々あるかも知れないが特に次の二點が指摘される。

第一は黄土層を貫流せるため含沙量多く、恐らく世界一であらう。元來黄土は非常な微粒よりなり水には溶解し易く、加ふるに比重が他の土壤に比し割合に輕いために河底に沈澱するも容易に固定せず、徐々に河底を流下し河口に一大淺瀨を現出して外洋と黄河內河との航通を阻害せるのみならず、このやうな黄土の特性のために立體的でなく平面的に擴まり、唯河床幅のみが駄々廣くなるばかりで深さはなく岩石より成る峽谷部を除いては全域を通じ平水時五米以上の水深を有しないのである。しかも含沙量の過多は流線の變遷常なく汽船航行の如きは思ひもよらない。

第二に黄河流域は少雨量地帶より稍少雨量地帶に跨り、年降水量の八割强は夏期に集中されるから雨期には每年洪水の危險にさらされるが乾燥期には水量過少のため水利水運上の利用價値が減殺される。卽ち流沙量と增減水期に於ける水量の調節を期すにあらざれば黄河に汽船を運航することは殆んど不可能に等しいのである。況んや黄河は多期三ケ月乃至五ケ月間（下流と中流）は流氷又は結氷による運航不能期間があつて營利的運營事業には多大の不利が伴ふ缺點がある。

一方民船は如何といふに、揚子江では本支流を通じ航行里程合計一萬二千粁、就航民船隻數九萬艘を突破せるに黄河では民船總數概算四千八百艘にしてその航行里程も上下航にて異り下航三〇四〇粁に對し上航は二一六〇粁で揚子江に比較すると全くお話にならない。更に黄河の民船航行區域を詳述すると左の如くである。

下航里程合計三〇四〇粁

寧夏平原より河口まで		二七〇〇粁
渭水	武功まで	二〇〇粁
汾水	曲沃まで	七五粁
洛河	大荔まで	三五粁
洛水	偃師まで	三〇粁

上航里程合計二一六〇粁

河口より孟津渡まで	七九四粁
陝州より禹門口まで	二一五粁
喇嘛灣より寧夏平原まで	八一一粁
枝流航行區域前記同樣	三四〇粁

上下航に八八〇粁の差のある譯は流域の地形が三段階をなし各段階の中間

地區は山岳斷走して峡谷狀をなし瀑布あり急灘もあると云つた形で民船は下航はするが上航は出來ない爲である、この難所が所謂黄河三險であつて壺口と禹門口と三門口とがそれである。

壺口は一名黄河のナイヤガラの稱がある。山西省吉縣々城の西々北二十九粁内外、黄河左岸に龍王辿と稱する部落がある。右岸の陝西省宜川縣の西龍王辿と相對峙してゐるが、この東西龍王辿村の下流に於いて黄河は頁岩よりなる極端な峡谷をなし、それまで二百米乃至三百米の河幅を存したのがこの峡谷の入口で恰も壺の口のやうに狹まり瀑布をなしてゐる。瀧口は西龍王辿村の下八百八十米の地點より始り瀧口より約二百米の間に十九米を落下する瀧口では幅五十二米あるが、それより四百二十米の間は全く信ぜられぬ程河幅狹まり最狹部は僅かに十八米、廣き所も三十四米にすぎぬ、何分河幅が急に五分の一以上に狹まるのであるから水勢の狂奔怒號する樣は言語に絶するものがある。かゝる峡谷を三粁半下ると峡谷は稍開け二、三百米となりて禹門口に至るのである。壺口より禹門口までの距離約七十粁、黄河はこの間に於いて海拔四四五米より三六五米に降下する。

尙ほ壺口には民船が降下するために左岸に沿うて東渠と呼ばれてゐる渠道がある、自然的のものか人工的のものか不明であるが瀧口より四百五十米上から始り渠幅は最大の所で六十米、最狹部で八米、普通は十米位である、渠の長さ九百米で渠口の標高四四七米あり出口との落差は二二米八七で勾配四〇〇分の一弱であるから民船は降ることは出來るが遡ることは困難である。

壺口附近では毎年十一月より流氷があり、氷塊が壺口に堆積しその深さ二、三十米に達し凍結する、結氷すればその上を車馬も交通出來る、土民はこれを氷橋と呼んでゐる。翌年四月末に至り解氷すると瀑布となる。但し增水時には水勢急なため瀑布の形は行方不明となる。陝西省建設廳の測定によると瀧口の流速は秒一米八〇糎あり平水時に於ける横斷面九七方米で流量は秒一七四立米、瀑布の落差は十五米六糎あるといふ。

禹門口は禹貢の「導河積石、至于龍門」の龍門である。正長岩の峡谷で最狹部は幅五〇米である。この附近では數層の炭層が黄河を横斷して居り、毎年增水時には石炭の塊片が百十餘粁も押し流されて山西省永濟縣の大慶關附近の左岸に打ち上げられる、土民は笊をもつて黄土を洗ひ去り石炭だけを選り取る。これは毎年繰り返されてゐる事柄で大慶關附近の部落民は石炭を買はないで濟まされると云つてゐる所から判斷すると、相當量の石炭が毎年、禹門口附近から洗ひ流されてゐるらしい。

龍門から下流、潼關の彎曲部に至る間が黄河全域を通じ最も幅員の大きな所で十粁から十五粁もあり俗に「三十年河東、三十年河西」と稱されてゐる地域である。即ち二、三十年間には必ず一度は大洪水があり、洪水毎に河床が變化することを云つたもので、現に昭和六年までは大慶關附近から河床は西南に發展し朝邑縣城附近では河岸と城壁とは近々一粁にも達せず、これがため左岸にも陝西省の地域があると山西陝西兩省で永らく係爭の結果、陝西省側の勝訴となり、黄河左岸の陝西省を平民縣と命名し、大慶關にその縣治を置いたのであつた。然るに昭和七年以後永濟縣西門外より河床は正南に向ひ左岸の蠶食せられること數粁に及び大慶關は河中に沒し右岸は朝邑縣城より五、六粁も遠ざかるに至つてゐる。今に山西省側で右岸に山西の領分があると主張するかも知れない程河道の大變遷振りである。

潼關附近で渭水、洛水を合した黄河は水量も豐富となるが一面含沙量も頗る增大する。そして潼關より東折する頃より河幅は又狹まり二百乃至五百米位となり河南省陝縣々城の下二十五粁で三門峡に入る。三門峡は石灰石の峡谷で河中に九つの岩が突出して居り水道が三つに分れてゐるのでかく呼ばれる。南水道を鬼門、北水道を人門、中を神門と呼び舟筏は人門を降下する。水道は神門最も廣く約五十米あり人門は最狹部三十米位である。

最初三門は舟筏の下航すら不可能だつたので、三門の前後三十華里は船車連絡による貨物の運搬をなしてゐたが歷代これが開鑿には相當頭を惱したらしく結局人門の開鑿に成功したが、それとて溯河は不可能である。三門の標高は二六〇米で三門一粁の間に於ける落差は四米二〇糎である。

禹門口より上流を山河と稱し、山河を流下する船を瓢船と呼ぶ。瓢船は禹門口に着くと、貨物船體共に賣却される。又禹門以下を川河と云ふが、川河に就航する民船のうち圓船（十八瓲積）のみが三門を降り京漢線鐵橋に至り、これまた船體貨物共に賣却されるのが例となつてゐる。

（筆者は東亞研究所囑託）

喀喇沁の人々

長野　賢

明治三十九年一月と言へば、日本がロシア帝國を破つて世界史に輝しい一頁を加へた日露戰役の翌春である。

北京東城の一角、喀喇沁王クンサンノルブ王府內の前庭に春まだ淺い陽光を浴びてカメラの前に並んだ三人の少女、海老茶の袴に振袖の着物、メリヤスの襯衣を袖口から覗かせて革靴を穿き、お下げの髪にリボンさへつけたその姿は何處から見ても可憐な日本の女學生としか見えない。誰か知らう、此の少女達こそは內蒙古喀喇沁王爺府からはる〲山を越え曠野を越えて、蒙古の文化の爲に少女の身ながら、極東の君主國日本の東京へ、鵬程萬里ももののかは、留學の途に着かうとする健氣な蒙古少女の鹿島立つ姿であつた。十五歳の何惠貞、十四歳の于保貞、更に一つ幼い金淑貞の三人が敬愛する日本の烈女川原操子女史に連れられて、王爺夫人の兄肅親王と日本大使館の好意から贈られた晴れの日本着物を身につけ、蒙古が送り出す最初の留學生の大任をか弱い双肩に荷ひ、永年の間暗澹たる原始の闇の中に文明の光から見捨てられ呻吟する蒙古の人々にさん〲と輝くプロメチウスの火をオリムポスの炬火をもたらすべく、選ばれてつく首途であつた。

（蒙古と支那と日本を結ぶ親善興亞のルートが喀喇沁——北京——東京と劃されてゐた事を我々は忘れてはならない。肅親王やその妹婿のクンサンノルブ王爺及び彼等が好んで交誼を厚くした日本の志士・女傑・篤學者が今日東亞新秩序の基礎に貢獻した先驅者としての功績を想起せねばならぬ。日・露兩國に戰端開かれるや、報國の赤心一身を鴻毛の輕きに比して從容死地に赴いた沖・横川一行の烈士の爲に、喀喇沁の王爺やその股肱金振鐸が與へた援助は絶大であつた。更に又、邦家の爲蒙古文化開拓の爲に優しい女の身でありながら男に負けぬ烈々たる氣魄を以て喀喇沁の人々から慈母の如く敬愛された若い典型的な日本女性川原操子女史。東洋文化の爲一身を捧げて盡瘁する鳥居龍藏博士。喀喇沁の人々はその他多くの美しい日本人を敬愛しそして愛された。歴史に假定を許すならば、若しも清朝があれ程急激に崩壞しなかつたならば、先見の明のあつた聰明な王爺クンサンノルブが大總統袁世凱に軟禁せられなかつたならば、蒙古獨立の旗が喀喇沁旗から押し立てられてゐたならば、興亞の歴史は何頁かを書き變へられてゐたに違ひない）

＊

「ミヅ　ガ　ナガレマス」可愛いゝ顔を泣き出さんばかりに歪めて金振鐸の娘金淑貞は船員の前で僅かに覺えてゐる日本語の片言を懸命にくり返した。

閉め忘れた舷窓から海水が浪の礫を投げ込んだのである。川原先生が暫くでも居ないと少女達は悄氣込んだ。無理もなかつた。見渡す限りの海・海・海いたいけな十三、四歳の少女が母を離れ、兄弟姉妹に別れ、未だ見ぬ千里の異境に、涯も無い大海原を渡つて行くのだ。

故郷でなじんだ顔は川原先生一人ではないか。もう今からは先生一人が母であり、家族であり、故郷であり喀喇沁であつた。だから後年少女達がいくら東京の生活に慣れ、青山澁谷の實踐女學校の女學生になり切つて後もこの愛情變りにはなかつた。

「おゝ忙しい、忙しい」「センセイ　ハ　ナゼ　イソガシイノ？」「皆さんも、大



蒙古活字と西藏活字の創造者　汪睿昌氏

きくなつたら判りますよ」先生の忙しい譯は大きくならないでも間もなく判る日が來た。川原操子女史は一宮氏に嫁いで行つた。少女達は、故郷であり喀喇沁であつた先生がやつぱり一人の女性であるといふ事を理解するには未だ餘りに幼なかつた。淋しいと云つては慕ひ先生をとられたと云つては泣き出すのであつた。美しい愛情だつた。此の美しい愛情は幾十年の後までも少女達の心の中に根を張つて、日本人はいゝ人間だ、日本人に惡い人間は居ないと信じ込ませる位力强いものだつた。

（汪金淑貞夫人から直接聞かされた此の挿話を叙する事によつて、私は一人の日本人としての感謝を一宮操子夫人に捧げたい。

「えらい方だつたんですねえ!」私。

「それはそれは立派な人でした」汪金夫人。



當時の蒙古の留學生と鳥居龍藏博士夫妻

*

正しく、それから三十幾春秋を經た今日猶敬愛の情微塵も消えず而もその故に日本人は立派であると斷ずる汪金夫人の信念の中に、人間として日本人として、操子夫人の人柄の立派さ美しさがさんぜんと生き輝いてゐるのを知つた私は、改めて日本人を見直す氣持になつた。たつた一つそれだけを得ただけでも往年の蒙古少女金淑貞は留學した甲斐があつたのではあるまいか。そしてそれは往年の川原女史の多くの功績の中の一つの見事な成果であらうと私は信ずる。

*

後年息子の多篤布を日本の早稻田に留學させる程親日家だつたクンサンノルブ王爺は金振鐸を帶同東行、日本を視察して以來一層の親日家になつてゐた。日本の新たなる文化を採り入れる事によつて蒙古の疲弊が救はれるとの固い信念から三人の少女を始め多くの青年が日本に送り出され、喀喇沁王府には女學堂や中學堂、武學堂が建てられ、日本の教師が招かれ、志士・名士が往來した。熱河省承德と赤峰の中間に位する王府に、蒙古復興の曙光が射すかに見えた。

卓索圖盟喀喇沁右旗出身の一青年汪睿昌が選ばれて東京に赴いたのも其の頃だつた。明治の末年東京振武學校を卒業すると直ぐ轉じて慈惠醫專に醫學を修め、民族復興の理想に胸ふくらませて喀喇沁に歸つた汪睿昌は、福島中將の命を受けて當時蒙古に在つた騎兵大尉木村直人と協力し專心蒙古騎兵の訓練に從事した。成吉思汗以來の精悍なる蒙古騎兵が喀喇沁や巴林から生れようとしてゐた。

曾ての日の蒙古少女金淑貞が母親に呼び戻された喀喇沁で、生涯の伴侶として選んだ夫こそ汪睿昌であつた。

汪夫妻が過した多難で數奇な半生を詳述する事は本文の目的ではない。汪睿昌がそのよき內助の功を得て、蒙藏文化の爲に心血を注いだ末、或は蒙古文活字を創造し、西藏語活字を造りあげ、更に蒙漢字典・蒙漢分類字典・元史・金史・遼史・成吉思汗傳・成吉思汗談話等多くの有益な書を編纂し、蒙文三國誌・蒙文四書・蒙文聊齋が世に現れるに至つた多大な功績を特筆大書したい。

*

汪夫妻の息、汪雲騰は日本山口高商卒業後、滿洲中央銀行に職を奉じてゐる。

汪氏が蒙古文化史上に巨大な足跡を留めて過勞の故に亡くなつて既に數年今北京北池子五十七號蒙文書社の一角に多くの遺書を守つて汪金淑貞夫人はさゝやかに暮してゐる。そして班禪印綬處の牌子の下に、蒙古と支那と日本を繫いだ昔の夢が靜かに眠つてゐる。

（筆者は北京特別市公署財政局勤務）

同蒲線をゆく

水野清一

おしつまつた十二月十二日、午後九時三十分發の列車で大同驛をたつ。朝の驛頭はひどくさむい。貨物との混合列車であるが、車內はスティームであついくらゐ、それに京包線ほどこまないのは何よりもしあはせである。そとはかんかんに大地まで凍つた多景色、山かげ、土かげにまだら雪がみえ、川も一わたり凍つてしまつてゐる。窓ガラスは水蒸氣でくもつてみえない。たいくつなまゝに、ときどきふきとつてそとをみる。ひろびろとした平野に、人かげも、樹かげもない。盆地をとりまいた遠い山まで、何のさへぎるものがなく平坦な土がつゞいてゐる。さみしい風景である。列車は玉河（ユイホ）の右岸にそうて南進する。懷仁、岱岳鎭。朔縣のちかくになつて桑乾河（サンカンホ）をこえる。河幅は二三百メートルあるが、水量はさうたいしたものでない。それでもいはゞ蒙疆第一の河で、流れては永定河となり、蘆溝橋下をゆくのである。

午後三時半、朔縣へおりたころには猛烈な風が砂をとばす。まことに文字どほりの朔風である。眼もあけられないし、口のなかもたちまちにジヤリジヤリといふ。洋車（ヤンチオ）にひかれるまゝに、十町ほどのところをはしつて、やつと城門をはいつた。城內はさすがに風もよわく、砂もとばない。

「支那の城壁といふのは警備のためかとおもつたら、さうではないんですよ。あれはまつたく風よけのためなんだ。」

このあたりではたらいてゐるらしい日系の警察官が、いまゝですつかりだまされてゐたのをつひ發見したかのやうにつよい調子で、だれかにはなしてゐるのを聞いた。車中のはなしは、たゞそこゝの城壁にふきつけられた砂山をおもひださせるのみであつたが、おりてみると怱ちこの風なのである。

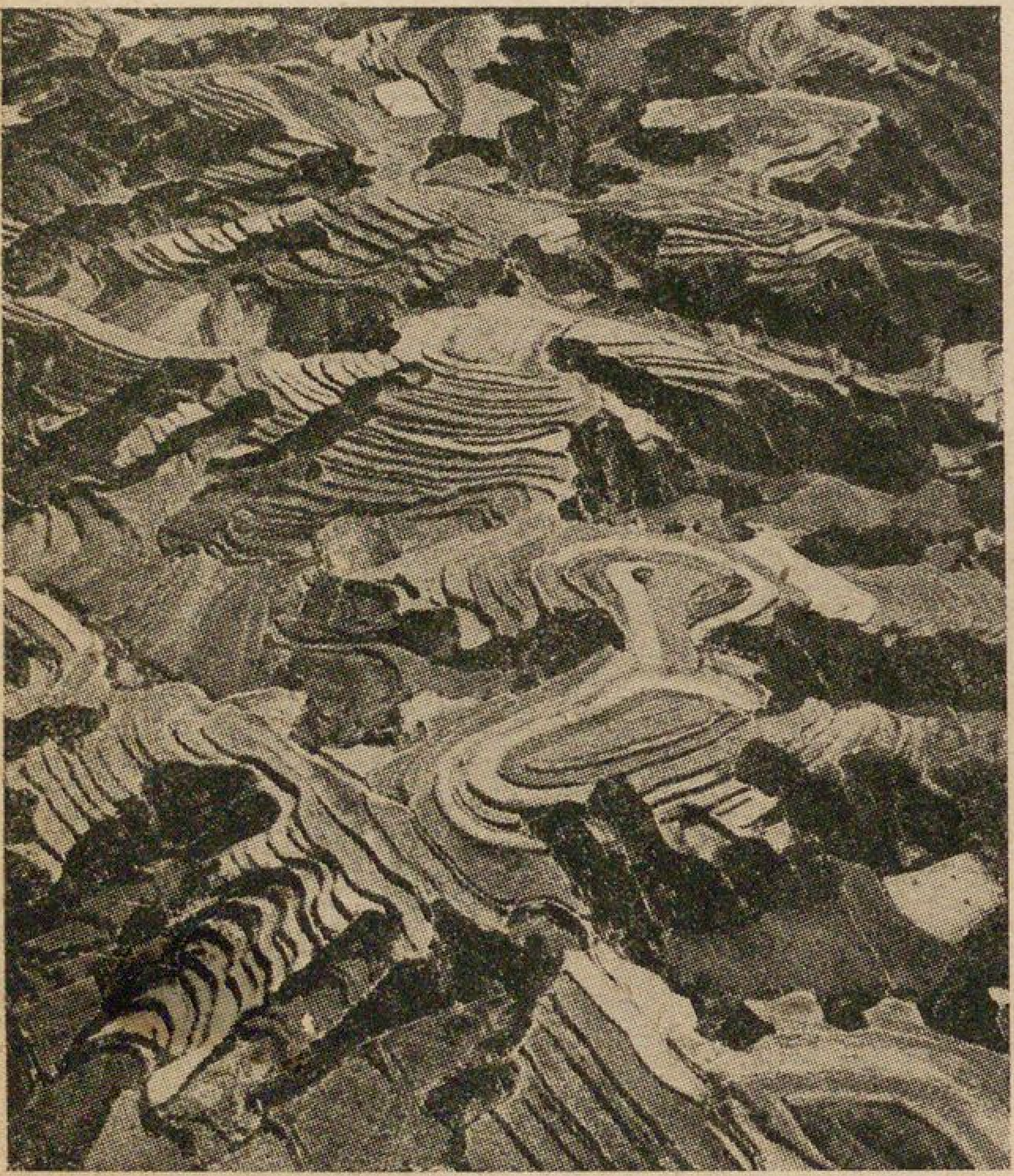
しかし、こゝの城壁はりつぱだし、町のなかはしづかである。街路も石じきで、古風な軒なみがうれしい。

◇

朔縣におりたのは、崇福寺といふ古寺があつて、こゝに遼金時代の建築や壁畫があるためであつた。みると、それはさうたうによいものであつて、應縣佛宮寺の壁畫がおもひだされる。應縣は岱岳鎭からすぐ東にある縣で、その佛宮寺の木塔は遼代の建築として、古くから有名なものである。さる八月には、これを訪れて、そのマツスに威壓され、木ぐみの堂々たるのに感服させられたのであつた。なほそのほか、大同の上下華嚴寺、善化寺などにも遼金時代の建築があつて、晉北地區は比較的に古建築のよくのこつてゐるところらしい。

◇

翌朝七時の列車にのる。これは昨夜〇時四十五分に大同をでた太原行直通列車である。車中はあたゝかで、すいてゐる。だが昨夜來の風に座席といはず、窓といはず、すつかりほこりをかぶつてゐる。どこへ腰をおろしてよからうか、すこしたじろぐ。しかたなしに、おもむろにふろしきをとりだして一わたりほこりをはらふ。そのうちに列車長が交替して、ボーイに掃除を命じ自分もかひがひしく車內の掃除をしてくれたので、何だか心がすうーとお



山西省の黄土地帯

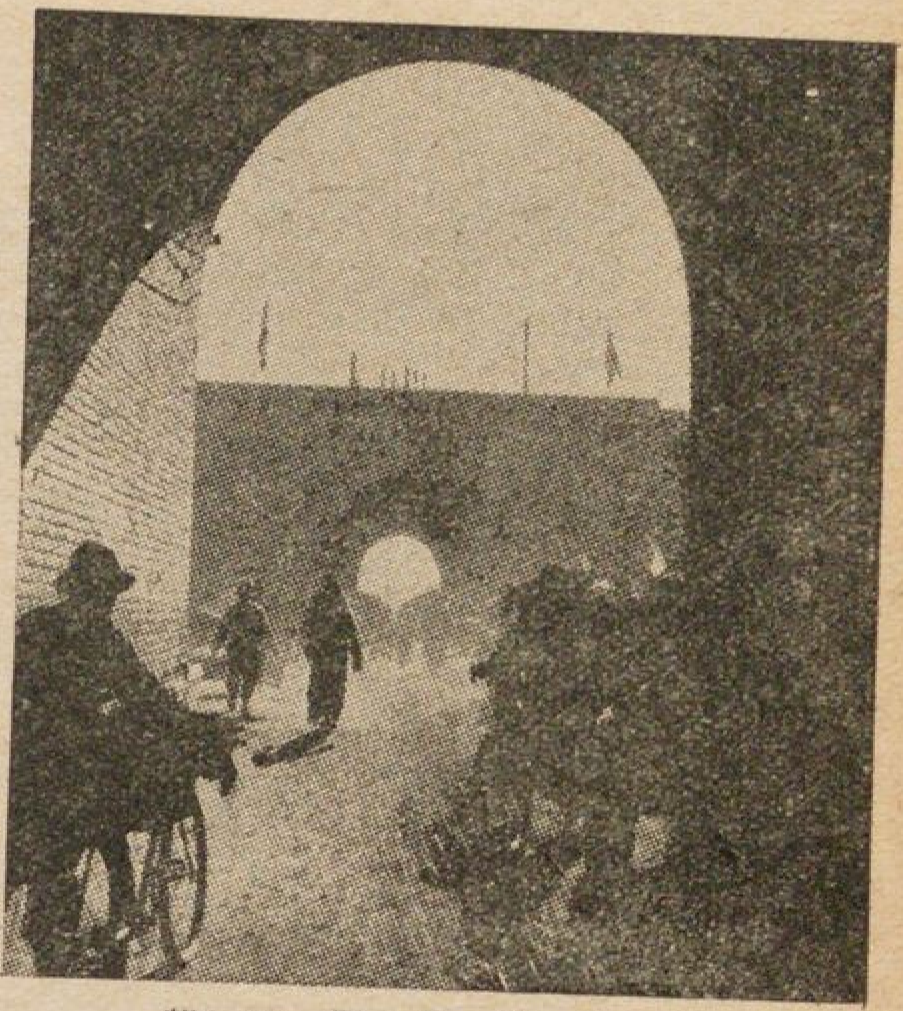
ちつくやうなおもひがした。

◇

山にかゝる。山といつてもむろん木はない、たゞの山である。つまり起伏した黄いろい土の堆積にほかならぬ。

これを掘り切つてレールがはしつてゐるのである。うとうとしてゐるうちに陽方口もこえたらしい、これでいよいよ内長城線をぬけて、山西にはいつたのである。山のはらをつたつて列車は一しきりはしり、山腹にある寧武驛にはいる。縣城はせまい谷のむかふに、朝の陽光をあびてくつきりとうかんでみえる。民家、廟(ミャオ)、人どほり、河岸からおこつて蜿蜒として山へはひあがつてゆく城壁がとほく、しかしはつきりとみえる。

九時二十七分、列車は寧武驛を發し縣城からしだいにとほざかつたが、しばらくするとまた縣城が目の前にあらはれた。かくれてはあらはれ、あらはれてはかくれること數回、ふしぎにおもつてゐると、列車はジグザグの道を通つて山上へ山上へとのぼつてゐるらしい。今通つてきたレールが、またこれから通らうとするレールがすぐ目の前にみえる、その間にはさうたいした谷もないのである。なんだかばからしいやうな氣持にかられる。



太原首義門の朝

こゝで山をのぼりつめると、いよいよくだりになる。これを分水嶺としてこれからは滹沱河の上流となる、寧武の川は北流して桑乾河にはいるのである。これからはせまい谷、沙岩のあひだを流れる溪流にそうてくだり、しばらくしてまたゆるくなつた川にそうて進む。と、河岸にひろがつた軒崗鎭の石炭町がみえだした。町のまんなかには十字架の敎會が嚴然と立つてゐる。

沙峪口あたりでやゝひらけはじめ、原平鎭ではひろい平野となる。三時半になつて、忻縣についた。こゝはもう滹沱河上流の大平野である、東方には山もみえぬ。

こゝから南下して、ひとつの丘陵をこえると、汾水の太原盆地になる。ひくい丘陵だが、この丘ひとつで娘子關に出る滹沱川と、晋南を流れて黄河に入る汾水とをわかつてゐるのである。

夕闇がせまり、十四日の月がやうやく輝く八時二十分、太原驛に着いた。

◇

太原はさすがに山西の省城である。大同よりも大きくはるかににぎやかでもある。それに電燈もあかるい。太原の博物館、傳公祠、崇禪寺、晋祠鎭、天龍山石窟などをみて、一週間くらした。それに清源の葡萄酒、山西の白酒少々但し、山西菜といふほどのものはない。

◇

十二月二十日、六時半起床、八時太原發。太陽は九時にやつと出る。出ると、こんどは霧、灰色の霧があたりをつゝんでしまふ。たゞちかくには麥田の青い芽がみえる。何といふちがひであらう。大同から來た目にはすべてがうるほひのある景色である。もちろんあたゝかくもある。しかし、列車のなかはかへつてスティームのまはりがおそくて、さむい。水蒸氣がガラス窓にこほりつく。座席は超滿員である。

同蒲線全長八三三キロ、太原蒲州間四七七キロ。といふとあまり大したこともないやうだが、太原から蒲州までは三日かゝる。こまかくいつて二日半である。どうしても臨汾一泊、運城一泊、あとまだ半日かゝるのだから、乘つて行つた汽車でそのまゝひきかへすとしても、完全に五日間を要するわけである。だから、同蒲線南段をゆくのは旅行者にとつてかなりの決心がいることである。

楡次、太谷、平遙。このあたりの村はりつぱな城郭をもつてゐる。埤槃の堂々たるつくりで、大同あたりの縣城よりもりつぱである。それに平遙あたりでは實に密接してゐるのに驚ろく。

介休から左手はるかに山があらはれる。義棠からは黄土の丘陵地帶にはいる。汾水もこれを斷ち切つて流れ、レールはこれにそつて南走する。水の流れはゆるやかで、そとばあたゝかいらしい。ときどき穴居もみうけられるが外觀には塼などをつかひ、實に堂々としたかまへである。

霍縣にはいるころすこしひらけてくる。平坦な黄土の段丘を左にしてすゝみ、つひに段丘上にでる。段丘のきれ目にはちらほら水田がみえ、左の方はるかに、晋南の名山霍山がそびえてゐる。臨汾着は七時三十五分、定刻である。(つゞく)

(筆者は東方文化研究所員)

丁丁微苦笑記

北京電車物語

高木健夫

北京の電車が開通したのは民國十三年十二月、今から十七年前だ。北京の電車は、いまも問題になるが、開通當時の騷ぎはまた格別であつた。

自動車を汽車といふ。しかし電車ともいつた。ところが、こんどは角を生やして火車のやうにレールのうへを走る特大電車が出現したのであるから、當時の北京人たちにとつては、なにさまこれはセンセーションであつた。

どんな風なさはぎがあつたか？　古い日記を繰つて、拔き書きしてみよう。

電車開設反對論のこと

王城の地、北京の都市美をボートクする電車開設ゼツタイ反對といふ聲がだいぶあつた。その反對論者のなかには、宣教師や交民巷の眼の碧い住民ドモも入つてゐたのだから愉快である。一方に都市美ソンチョウの反對論があるかと思ふと、大學教授や學生、新聞記者のなかには『電車を北京に敷くといふことは洋車夫の生活を脅威する重大な社會問題である』といふモツトモらしい反對論があつて、この陣營では洋車夫を狩り集め示威游行をやつたりした。

電車デビュすること

このやうな反對論は、レールと架空線だけが大街に空しく走つてゐる約一年間つゞけられたが、いよいよフランス製（？）のオレンヂ色に塗つたモダン圓太郎馬車といつたスタイルの電車が駛り出すと、いつのまにか消えてしまつた。電車のホンモノが現はれたら商賣仇の洋車夫ドモは、きつと石を投げつけるだらうとか、洋車夫のミイラがゴロゴロ出來るだらうとか、いろいろいはれたものだが、頭等と貳等に車室を分けたオレンヂ色の電車が、上海で講習を受けて來た急造の司機生（運轉手）によつて丁丁と運轉されるやうになつてからも洋車の失業といふ現實はさつぱりみられなかつた。むしろ洋車夫たちは（現在でもさうであるやうに）電車の停留所に雲集して客を引くといふ有樣であつた。なアーんのことだ、と最初電車と洋車夫との社會問題的迷論に耳を傾けたぼくらは、いさゝか拍子拔けの體であつた。

電車惡評のこと

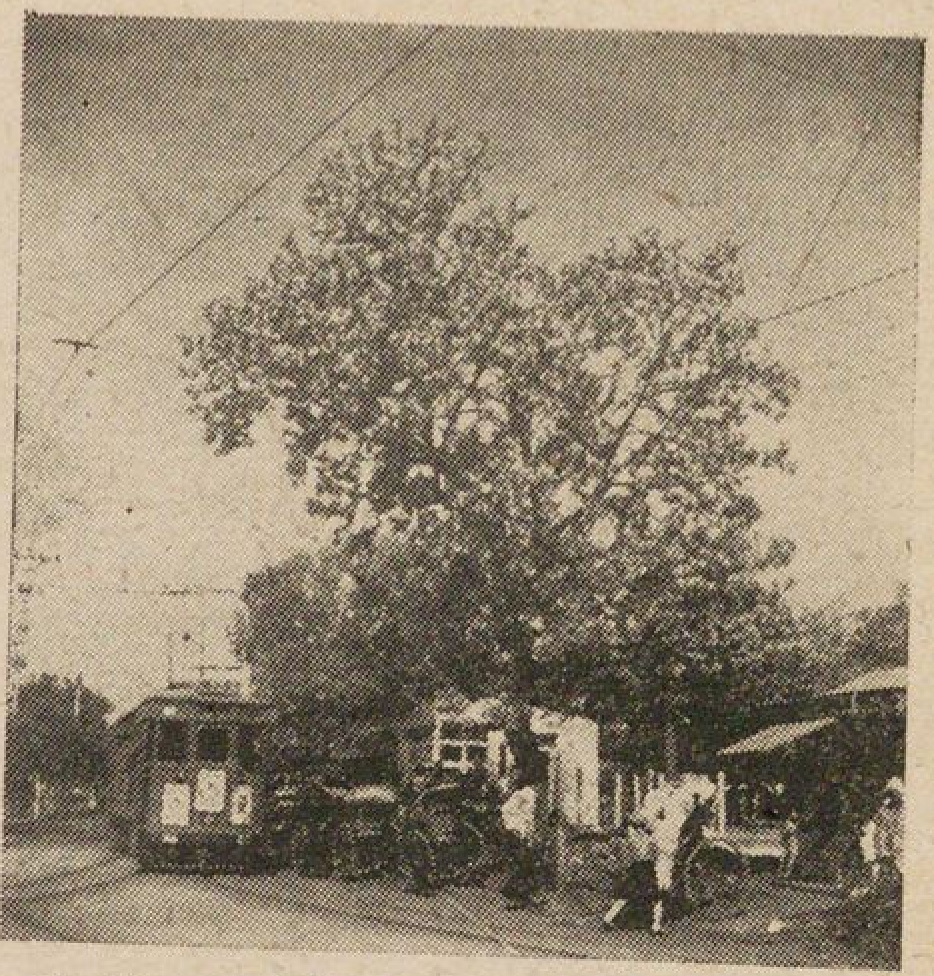
電車賃は洋車に較べて高かつた（いまと反對である）たとへば東四―東單を洋車ならば六個子兒のところを電車にのると十個子兒とられるのである。頭等ならば二十個子兒である（當時は銀貨の一毛錢が銅貨二十四枚、つまり二十四個子兒ぐらゐであつた）

新米の司機生は纏足の婆さんを轢殺したり、駱駝に衝突したりしてしよつちゆう事故を起してゐたし、司機生とともに上海から入つて來た掏摸がハコノリをはじめて、電車内の被害は、煤球兒中毒の死人よりも多く新聞を賑はした。そこで、電車公司は、あはてゝつぎのやうな貼紙を、車內に掲示した。

隨身物件　各自當神　謹防扒竊

悲喜劇相次ぐのこと

頭等は籐のベンチ、貳等は木のベン



チ、吊革がとても高く、片足の爪先たてて辛うじてブラ下がり得る仕掛になつてゐた。しかもさんざんな惡評にもかゝはらず、電車は滿員鈴生り(すゞな)の盛況であつた。客ダネは爺さん、婆さん、軍人、學生、サラリーマン、番頭風の男。つまりは、博覽會のメリイゴウラウンドのつもりで、坐つ(の)てゐるのであつた。

ぼくもそのつもりで電車にのり、車内風景をヒマにまかせて採集してまはつた。まづ車掌のことば

愛下的沒有(スウバイロウでず)　四牌樓(おおりのかたはありませんか)、四牌樓！
往裏(なかほどへ)！　請往裏(ねがひます)！

婆さんはカビの生えた金切聲をふりしぼつて

我要下去(おりますよオ)　借光(ごめん)　借光(くだせえ)。

滿員電車に立ちづくめの爺さんのところへ、車掌が切符を切りにきた

上那兒去(シャンナールチュイ)？
王府井大街(ワンフチンターチエ)。
十個子兒(シーコツル)！

『なに、十文だと？』ととたんに爺さんはやりはじめた。

『そりや無法だわ、車掌さん。俺(わし)はこの出口(なか)にかうやつて立つとるンぢや。車室で腰かけてゐる人が十文なら、わしは七文でようがせう。』

洋車(ヤンチョウ)を値切るつもりで、電車賃を値切る婆さん、爺さんのザラにあつたことは、いま更いふまでもないことである。

軍人、電車に突撃のこと

頭等(トウトン)はたいがい無賃乘車の軍人によつて占領されてゐた。

ある日馮玉祥の國民軍の學生軍の兵士が平服で電車にのり、乘車賃を拂へ拂はぬの押問答をはじめた。それをみてゐた兵士の同僚が電車を降りて學生軍の本部へ急報すると、かれらは、ソレ、とばかりに一箇中隊が機關銃をもつてその頃の終點の前門(チエンメン)へくりだし、その電車がやつて來るや、いきなり電車に突撃を敢行、車體をめちやめちやにし、車掌を半殺しにして引きあげてしまつた。

ストライキ勃發のこと

この事件があると電車從業員は結束してストライキに入つた。その要求は賃銀値上げにあらず、遇改待善にあらず、ジツにつぎのやうな要求であつた。

『吾人の生命を保證し、吾人が安んじて業務に携はり得ることを電車公司が保證するに非ずんば、吾人は斷乎として就業せず』

このストライキはたつた二日で解決したが、この二日間は、北京城内は電車は一臺も動かず、ひつそり閑と靜まり返つてゐた。――これが、北京電車公司第一回の罷業風景であつた。

京畿總司令部布告のこと

その後、もう一ぺん電車襲擊事件があつた。今度は軍人ではない。警官の卵ドモである。民國十四年三月だ。

電車が東城線の終點である北新橋(ペイシンチャオ)へ着くと、その附近に待伏せしてゐた正服正帽の高等警官學校の生徒數十名が電車を襲擊し、車體を破壞し、車掌に重傷を負はせたのである。

それから數日後、電車內に『京畿總司令部布告』としてつぎのやうな掲示が出た。

爲布告事查北京創設電車以來
交通便利　狼有益于人民　可
是電車亦係商業性質將本圖利
原與火車輪船一樣　若乘坐
自然必須買票　軍人之徒不肯
買票　甚且動毆兇行有碍電車
營業　妨害電車中乘客　倘地
方治安秩序因被擾亂　本總司
令部負有　京師治安責任　自
應竭力維持　所以布告周知嗣
後　無論何人凡坐電車均應買
票　倘查有冒充軍人擾亂情事
一經抓獲　定行重辦決不寬貸
仰各一體凛遵　切々此布
中華民國十四年三月十二日

ところで、けつきよく、こんな布告はなんにもならなかつた。軍人の只乘りは相變らず殖える一方だし、だから電車公司の收入は滿員の盛況にもかゝはらず減る一方であつた。

何しろ京畿總司令部の連中が、正服私服を問はず、この布告以後、堂々とさつまの守をきめこむやうになつたのだから、まことにもつて、この布告の威力と效果は大したものであつたのである。

（筆者は東亞新報主筆）

可園雜記

加藤新吉

可園の住民一齊に追ひたてを喰つてこのところ大いに參つて居る。

可園は初め大阪の某といふのが借りてこれを新來の日本人に分割貸與をした。その頃の持主は曾ての大總統馮國璋の第何番目かの夫人だといふことであつた。ところが、何時だか知らないが持主が變つた、買主は支那の物持、買値は十五萬圓といふ噂であつた。まだ賣つてはゐない、これから高く賣る爲に借家人を追ひ立てるのだといふ噂もあつた。たしかに二十五萬圓で賣に出てゐると説をなす者もあつた。其他さまざまの道聽途説が實に面白かつたが、面白がつてゐる間に手きびしい追ひ立てを喰ふことになつてしまつたのである。

去年の夏頃かと思ふ、總括借家人の差配から追ひ立ての話を聞いた。その前後から、支那人の一團、日本人の一組、日支混合の一隊など次々に可園を見に來た。私の借りてゐる一廓にも無斷で侵入し、無遠慮に室内をのぞき込んだりする者があつた。私自身も何度か腹を立てゝ抗議したことがある。實は賣家だから見よといふものですからと恐縮して去つた連中もある。軍の力でたゝき出せばわけはないですよと聞えよがしの捨てぜりふを殘して行つた奴もある。馮か某か知らぬが賣物に出してゐるらしいことを我々は推した。

年末近くなつて個々の居住者が領事館警察に呼ばれ、空け渡すやうにとの注意を受けた。可園は新なる買主の手に移り、買主自ら住むといふ話であつた。また、居住者の移轉先に就いては買主が世話をする旨申し出てゐるとのことであつた。さういふわけなら立ち退かねばなるまいと私は思つた。出ろ出ろと常に生活の本據を脅やかされるのは閉口である。が、出ようにも行先がない。借家がない、あつても支那人は日本人には貸さぬといふ。北京の日本人は殆ど家を探すことを諦めてゐるのである。華北交通三萬の日本人從事員、そのうち七千家族が日本および滿洲に別居して居る。北支にはそれ程住宅が拂底してゐるのである。買主が適當な家を探して呉れるといふのであつたら快く出ると私は警察官に答へた。

一日、買主と警察官と差配人との間に話が纏つて自分は手を引くことになつた、と差配人から告げられた。とたんに我々は誰から借りて誰の家に住んでゐるのか判らないことになつた。そこで、一夜可園居住者大會といふと大袈裟であるが、隣組の廻覽板をまはして、私の書齋兼客間の煖爐を圍んで常會を開いたのである。目下の居住者は華北交通社員六、辯護士一、大倉組、華北電々、日華工業等の社員六、計十三戸。家賃、水道料、電燈料其他の處置を申し合はせ、立ち退き問題の代表者に老辯護士氏、隣組々長として日華工業氏を煩はすことに決めた。

二月、警察からの要求に依つて再び集會、人事相談係の警官と家主代理と稱する支那人列席、三月初までに立退期日を決定報告せよと請求された。誰からの請求ですかと聞いたら、襲といふ人、その人が買つて住むのですかと聞いたら、自ら三十何人の家族を引き具して移り住むのだとのことである。そこで可園隣組常會がまた近く開かれるわけであるが、さて、十三家族何處へ行く。厄介な問題である。

（筆者は華北交通會社參與）

北支暢談

洋車

北京は依然として洋車（人力車）の氾濫時代だ。大街は勿論、胡同（横町）と胡同に洋車の姿を見ないことはない。電車が開通しても乘合自動車が出來ても洋車の數は增すばかり、名所の遊覽に通勤に通學に、さては風呂に行くにも野菜買ひにも北京の胡同になくてはならぬ脚である。

この洋車が初めて北京に姿を見せたのは光緒十二年（明治十九年）で、日本から來たと云ふので東洋車と呼ばれた（支那語で日本を東洋と云ふ、洋車はその略稱）

しかし當時の洋車は殆んど自家用車で營業車はなかつた。車廠を開設して營業を始めたのは光緒二十四年（明治三十一年）で、以來急激にその數を增しつゝあつたが、義和團事件が勃發すると洋車は日本から輸入されたと云ふかどで破壞、燒却され大變な厄を蒙つた。

義和團が平定されてからは以前にもまして流行をきはめたが、當時の洋車は鐵の輪で拵へたもので、現在のやうにゴムの輪を使用するやうになつたのは宣統二年（明治四十二年）頃からである。昭和十五年末現在の登記車輛數は四萬二百餘臺、洋車夫七萬餘を算へ製造業者は七十軒、日に十二、三輛を製造してゐるが、その材料は總て日本からの輸入品である。價格は材料騰貴によつて事變前の三割乃至五割方高くなり、白銅車（柄の飾りやランプや接目などに白銅を使用したもので主に自家用につかはれる）は三百五十圓、黄銅車（柄の飾り、ランプその他に赤銅を使用せるもの、主として客待ち車に使用せらる）は、二百五十圓前後といふ。

孫文と鐵道

民國元年、民國政府の基礎定まつて袁世凱は目出度く初代大總統として就任し當時南京にあつた孫文の北上を再三促した。孫文はその熱心な招請に應じて愈〻北上することになつたが北京での歡迎振りは大變なもの、交通部に命じて天津より特別列車を仕立てわざわざ軍樂隊を組織して孫文の歡迎歌を作つたり、前淸時代ドイツ皇太子來遊のために準備してゐた二頭馬車をその乘用車とするなど、袁世凱は孫文を鄭重に遇した。

さて鐵獅子胡同の大總統府で南北兩雄の劇的會見が行はれたのであるが孫文は袁世凱の歡迎の詞に對して左の如き答詞を陳べた。

予今回初めて北上し文武百官の誠意ある歡迎を受け感謝に堪へず、一言予の所感を陳べて答詞に代ふ可し、自ら想ふに國家として永遠の生命あらしめんとせば、富强の途を講ぜざるべからず、國家を富ましむる途は鐵道に若くはなし、一國の產業を發達せしめ、文化を輸入せしむるもの皆此鐵道卽ち交通機關の力を借らざるべからず、國家を强くせんと欲せば練兵を急務とせざる可からず、大總統は武官出身にして練兵の事に關しては專門的智能を有せらるるを以て大總統にして十年間その位に在らるれば五百萬の軍兵を訓練せしむること甚だ容易なりと信ず、予不肖と雖も全國鐵道經營の任に當り、十年間に二十五萬哩の鐵路を敷設し得る自信あり、諸君希くは國家のため發奮努力し大總統と共に富强の途を講ぜられんことを云云

孫文は以上の樣に滄京直ちに鐵道建設の重要性を力說し、その鐵道計畫案を袁世凱に示したのであるが、愚昧袁世凱の容るるところとならず、一笑に附されて仕舞つた。

以來中國の鐵道は政客軍閥の私利の具に供せられ、或は歐米列强の利權の觸手となつたので、鐵道は中國の禍の門とまで稱されるに至つたのである。中國の鐵道建設が、若し孫文の理想通りに實現してゐたとしたら、今日の中國は大きな變化を來たしてゐたであらう。

事變以來支那の鐵道は日本の努力によつて著しくその面目を改めつゝあり國家國民の公器たる本來の姿に起直りつゝある。孫文の計畫の一つであつた滄石鐵道は最近日華の協力によつて石德線として實現せられた。彼が描いた夢は、共榮東亞の新事態のもと、諸民族の大同團結によつて今後著々實現せらるべきものであらう。旣に北支では華北交通會社によつて舊北支鐵道營業粁の九六％に當る五千八百粁が經營せられてゐるし、事變以來の新鐵道建設は八百粁に垂んとしてゐる。

支那の隣組

日本では部落會町內會隣組が組織され「相扶連帶の醇風」が行はれ、新らしい自治制度が誕生せんとしつゝあるが、この新體制下の寵兒も最近の所產物ではなく、我國には遠く大化の改新に五保組合があり、降つては秀吉の庄屋五人組、江戶時代にも五人組制

度などがあつたのである。ところが支那にも古く周禮といふ書物に「六郷の制」といふのが見えてゐる。卽ち比、閭、族、黨、州、郷といふ地方區劃制で、この基本區劃である比が五つの家の結合で、二十五家を閭、百家を族、五百家を黨、二千五百家を州、一萬二千五百家を郷となしてゐる。史記の商君傳には「五家をして相保たしめ、十家をして相連らしむ」「一家罪あらば九家をして擧發せざれば九家共に連坐す」とある。

德川家康が征夷大將軍となつた慶長八年、京都に盗賊が橫行したので洛中の商人達に十人組の組織を命じ、この組中に一人でも罪を犯した場合、他の九人も連帶の罪に服せしめたと云ふ。支那と日本との之等の制度の間には古く關係があるのかも知れない。

隋の時代には五家を「保」五保を「閭」四閭を「族」とした。

唐の時代には、三家を「保」四家を「隣」百家を「里」五百家を「郷」となし里と郷に長を設けて互ひに檢察させてゐた。宋の時代には十家を「保」五十家を「大保」十大保を「都保」となし「保長」を設ける制度が採用されてゐる。

明、清の時にも、盗難防止、天災地變の救濟、禮俗の補導等々に利用せられ、その自治制度は大いに發達した。現在も地方には保甲の制度がゆきわたつてゐて安寧の保持に大きな役割を果してゐる。

清談

三國時代、支那には清談といふのが流行した。これは國のためだの、社會のためだのとまじめになつて努力することを卑み、それより酒をのみ、詩を作り、琴でも彈いてのんきに日をおくることを大變高尙なこととして尙んだ。眼中國家も社會もなく、道德とか禮儀とかを無視したもので、天下が亂れようと外夷が侵入しようと、それらは風馬牛であつた。淸談が流行した原因は後漢の世に名節の士が多く殺されたこと、一つには民衆が漢末から三國時代にかけての永い間の天下の戰亂を厭うて「觸らぬ神に祟なし」で、いはゆる支那獨特の保身術に浮身をやつす風潮になつたことである。淸談の仲間で竹林の七賢人は有名である。卽ち劉伶、王戎、山濤、嵇康阮籍、阮咸、向秀の七人で、彼等は竹林の中の閑靜な住居に集まつて浮世はなれの淸談を樂しんでゐたのである。近來、支那の知識階級の一部の間に、これに似た逃避的な氣分が見受けられる。

禁酒の起源

治水の成功者として有名な夏の禹王は質素儉約の神樣のやうにあがめられてゐるが、その政治の上にも私行の上にも常に勤儉力行の主義を實現してゐた。ある時、儀狄と云ふものが初めて酒を造つてまづ之を禹王に獻上した。王は之を飲んで見て成程うまい、ところがやがてい〻氣持になつてたうとう寢込んでしまつた。ハツト目を覺ますと、禹王はさすがに明君である、「これは甚だうまい、しかし人の心を攪亂するものだ、いまにこれで國を亡す者が出て來るだらう」と云つて儀狄を斥け、群臣にも酒を飲むことを固く禁じた。併し臣下達は內々で儀狄に酒を造つてもらひ、禹に隱れてこつそり飲んでゐたと云ふ。

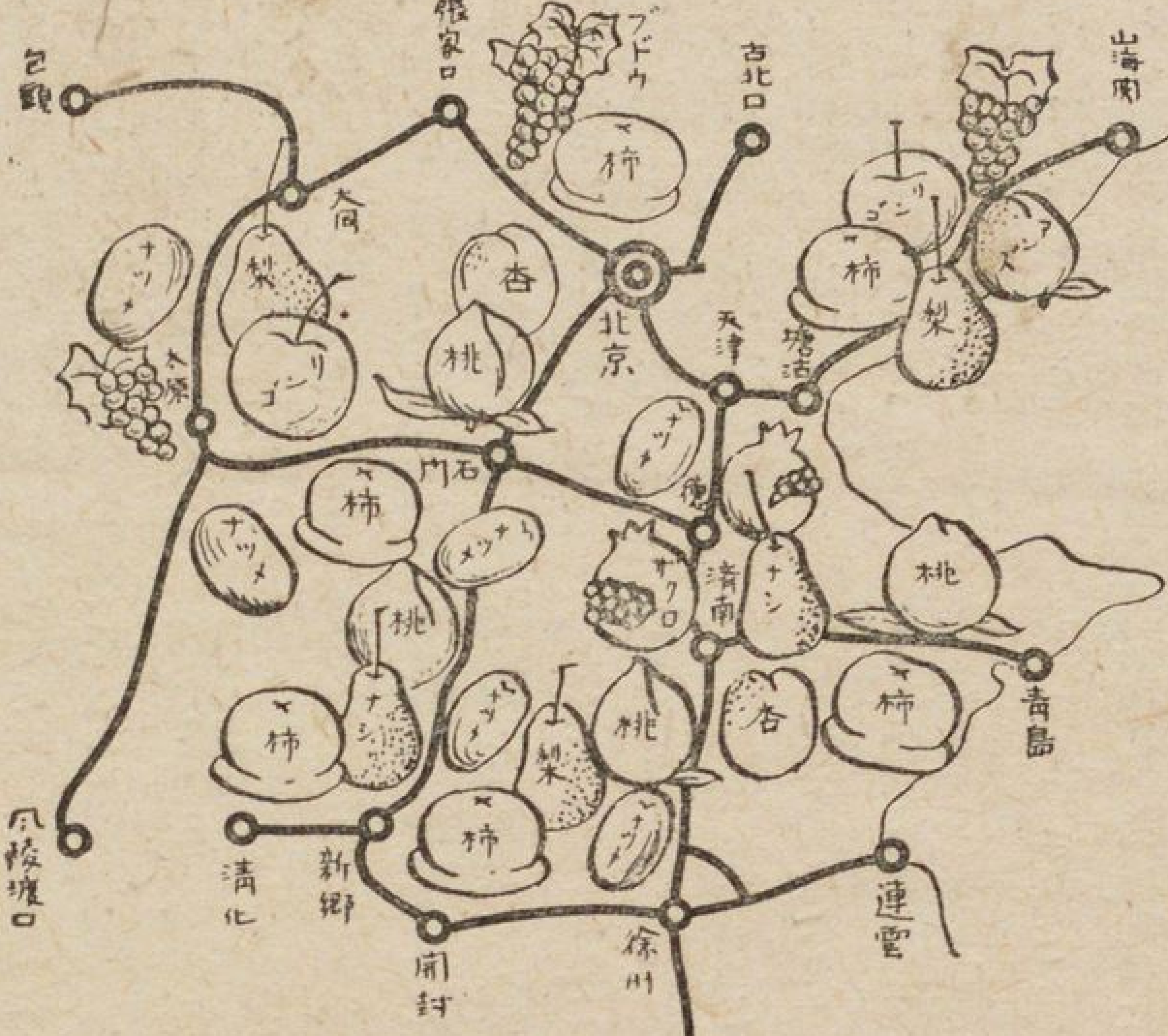


果物

北支蒙疆の統計 10

日滿北支產主要果實表（千瓩）

種類名	日本	滿洲	北支
梨類	一八二、二〇二	四一、七五七	五三二、〇六三
桃類	五三、七〇七	二、三八三	五四二、三五〇
柑橘類	五四八、四七五	—	—
柿類	二四三、五二六	—	二八〇、一〇五
リンゴ類	二一九、二一一	一九、八一五	八三、七七四
棗類	—	・一三三	二五九、七八九
杏類	—	一、六〇四	一五一、二五三
ブドウ類	七二、一四一	二三二	三〇、四〇五



北支ノ果實

北支は殺風景——だと云はれてゐるが、シーズンになると香りの高い新鮮な果物がどしどし出て來て色彩を添へる。河北・山東二省は昔から聞えた產地で出盛りの頃には道端の露店や、船の甲板に美しい果物が色とりどりに山ほどならべられる。芝罘の水蜜桃、昌黎の梨、南口の柿、宣化の葡萄など有名であるが、とりわけ宣化の葡萄は全支に知られ、また、日本葡萄の元祖だといふ人もある。全般に野趣に富み、その色彩の鮮明と素朴な味に特色がある。

果樹は氣候に對する適否から二つに分けることが出來る。卽ち夏季に降水量の多い地方に適するものと夏季乾燥する地方に良好なものとであるが、北支は東洋の內でも最も夏季乾燥の地で桃、葡萄、梨、リンゴ、櫻桃、ナツメなどの栽培に適してゐる。漢民族は、果實を好み、古くからその栽培を行つてゐたのであるが、その手法の低級さと舊來の慣習を捨てないこと、加ふるに、國家が果樹栽培に對して關心を持たなかつたこと等の原因から、北支の果樹園經營は、荒廢の一途を辿つてゐた。

事變後、各關係方面で、增產計畫が樹てられ、興亞院、華北交通會社の手で、果樹栽培企業化が行はれんとしてゐる。

その最も有望視されるものには、山東省では肥城の桃・アンズ、萊陽の滋梨、德縣の鴨梨、曹州の綿梨、益都の柿・蜜桃、樂陵のナツメ、芝罘の葡萄を始め津浦線各地のナツメ・ザクロ、河北省では昌黎、撫寧地方の白梨・蜜梨・アンズ・桃・ブドウ、泊頭の鴨梨などで、濟南、青島、昌黎などに罐詰工場を設立し、大規模な企業化を圖らうと云ふのであるが、これが實現された曉には「東洋のカリフオルニア」として北支は新しい大陸產業を世に送り出すことが出來るであらう。

昭和十六年三月十五日印刷納本
昭和十六年四月一日發行

四月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京 六四二二三番
電話九段（33）一四一五番 三三四四番

一册定價 三十錢（郵送料一錢五厘）
一ケ年分 金三圓六十錢

廣告取扱
一手取扱所 大阪市西區京町堀上通一丁目二五 一新社
電話土佐堀九三九

第一書房戰時體制版 各七十八錢

レイモント
農民 第四部 夏の巻
新居 格譯

ノーベル賞に輝く巨作!! 待望の第四部愈々發賣!!

作者レイモントの故國ポオランドは、今や曾つての如く分割され、世界の地圖から消えんとしてゐる。然し藝術は凡ゆる國境を超越する。この不朽の大作『農民』は藝術の永遠性の中に、その輝かしい光彩をとどめずには措かない。これは單なる農民文學では決してない。この作品から我々が受ける感銘は、農民文學といふには遙かに廣く深い人間思想と人間感情の深度である。

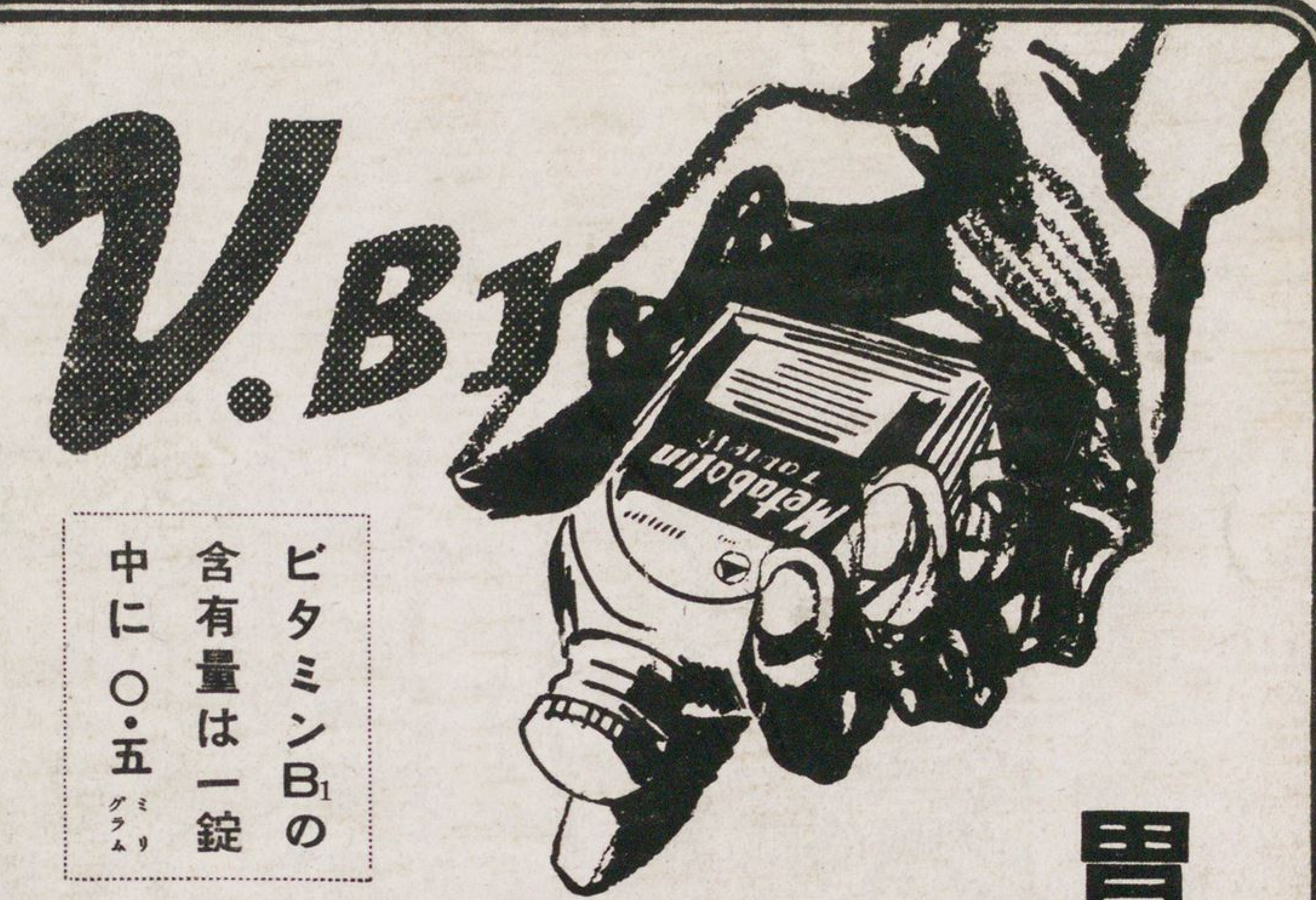
ヒツトラア
我が闘爭
室伏高信譯

十刷二萬部增刷出來!! 發賣以來二十五萬九千部!!

全ナチスの政治、外交、經濟の根本原理を明示せる盟邦ドイツの聖書として、またヒツトラア總統の大ヨオロツパ計畫の豫言の書として、更にまた世界新秩序建設の一大指導書として、益々白熱的に讀まれてゆく。今やドイツの對英策戰が着々進行し、まさに總攻擊の火蓋が切られんとするとき、本書こそ刻下の必讀書である。初刷發賣以來增刷に增刷を重ね、二十五萬九千部!!

書物はなるべく近所の書店でお求め下さい　第一書房　振替東京六四二二三


NISSEN
痒い皮膚病に
ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。
【特徴】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。
適應症
疥癬・頑癬・濕疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰嚢頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患。
包裝
一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）
ムナバール
Munaval
ムナバール
製造發賣元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店
大阪市南區順慶町二丁目



胃腸病・脚氣
榮養・發育…に

V・B_1の高單位療法

强 カメタボリン錠は、强力且高單位のV・B_1を含有し、V・B_1の缺乏に基因し特に大量の補給を必要とする胃腸疾患・脚氣、榮養不良、發育障害等……の諸疾患に用ひて胃腸機能を快調にし、弛緩せる胃腸の運動を活潑にして食慾を增進し、病衰せる細胞機能を賦活して榮養狀態を良好ならしめ、脚氣を治療、豫防し發育を促進して所期の効果を收む。

ビタミンB_1の含有量は一錠中に〇・五ミリグラム

〔適應症〕 脚氣の治療と豫防―衝心脚氣、妊娠脚氣乳兒脚氣 胃腸無力症、食慾不振。肺結核、肋膜炎肺炎其他の熱性疾患。病中及び恢復期の患者。妊・產・授乳時の榮養補給に。

〔國內價格〕 一〇〇錠（三円五〇） 三〇〇錠（一〇円）

☆酵母を添加せる「メタボリン錠」もあり

製造發賣元 株式會社 武田長兵衛商店 大阪市道修町

强力メタボリン錠

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年三月十五日印刷納本 昭和十六年四月一日發行（每月一回一日發行）第二十三號

北支 定價 三十錢